

先生方とともに
高校生の今と未来をつなぐ

〈ビュー21〉

高校版

2019
Volume 4

10

月

VIEW21

大海原へ！

特集

探究学習

——その時、教師は

改革事例から導く！

「学校教育デザイン」を描く道標

富山県立砺波高校

主体的・対話的で深い学びへ

実践 アクティブ・ラーニング

情報 北海道・私立札幌龍谷学園高校 相蘇孝哉

現代文 埼玉県・私立開智高校 加藤克巳

指導変革の軌跡

静岡県立焼津中央高校

兵庫県立川西明峰高校



自分たちの手でつくろう

先生 今年のオープンスクールも、君たち生徒会を中心に、生徒主体で運営を頑張ってくれたね。学校紹介の寸劇では会場から笑いも起きて、本校の魅力が楽しく、より深く、中学生に伝わったんじゃないかな。

生徒 生徒会全員で案を出し合い、今年は青春学園ドラマ風にしました。私が入学前にオープンスクールで見た寸劇でも、先生方が熱心に指導してくれることをアピールしていましたが、入学するとその通りで、おかげで私は資格をたくさん取得でき、自信を持てるようになりました。それが中学生にも伝わっていたらうれしいです。

先生 生徒会が提案した結果、今年から2日間となった学園祭でも、生徒同士で話し合っってプログラムを上手に組んでいたね。閉会式で流れた放送部作成の2日間のダイジェスト動画には、とても感動したよ。

生徒 昨年までは1日で慌ただしかったのですが、今年は、1日目がステージ発表、2日目は模擬店の日としたことで、ステージをじっくり見ることができ、普段とは違う友人の一面も発見できました。たくさんの人に「2日間でよかった」と言われて、準備は大変でしたが、とてもうれしくて、やりがいを感じました。

生徒 来年の学園祭もさらに盛り上げようと、既に全校生徒からアイデアを募集しています！

先生 それはすごい！自分たちの手で築いてこそ、高校生活の楽しさも喜びも感じられるものだからね。授業でも挑戦したいことはあるかな？

生徒 先生の勧めで、カップラーメンの商品開発と販売戦略に関する大学の特別講義を受けました。他校の高校生や大学生との議論は刺激的で面白く、将来、企業戦略に携わることが夢になりました。授業でも企業戦略に関連したことをもっと学びたいです。

生徒 私は、会社経営のシミュレーション大会に参加し、簿記で学んだ原価計算などが実際に企業ではどう行われているのかを実感できました。普段の授業でもその用語が使われている場面を想像できるようになり、より理解が深まっています。実践的な学びは、資格取得のためにも役立つので、授業でもっとしたいです。

先生 先生もそう考えて、学校全体で実践的な授業を増やす予定です。みんなの意見が学校をよりよくしていきます。これからも意見を言ってほしいし、生徒の代表である生徒会のさらなる活躍に期待しているよ！

熊見和祥先生 教職歴15年。同校に赴任して10年目。副校長。

兵庫県・私立神戸星城高校 全日制/商業科/共学/1学年 約390人/2019年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、金沢大、岐阜大、静岡大、岡山大、大阪市立大などに44人が合格。私立大は、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ197人が合格。

2 特集

探究学習——その時、教師は

4 ドキュメント ● 探究する教師たち

CASE 1 見通しが立ちにくい教育活動での支援のあり方を模索する
長崎県・私立純心中学校・純心女子高校 森 俊雄、大坪亮平

CASE 2 自分自身に向き合う環境を整える
東京都・私立かえつ有明中・高校 大木理恵子

12 対談 ● 教師に求められる探究マインド

生徒の悩み、もがく経験に、1人の人間として敬意を払う

東京都・私立かえつ有明中・高校 佐野和之／長崎県・私立純心中学校・純心女子高校 榎本六秀

16 学校事例 ● 全校体制での推進に向けて

兵庫県立加古川東高校

指導上の不安・負担を軽減するとともに、教師が意義を感じられる探究学習に

20 リポート ● 世界的な潮流

生徒や教師の「エージェンシー」を育む学びのあり方とは？

「地方創生イノベーションスクール2030第2期 (ISN2.0)」第4回研究会

24 付録

探究学習お役立ち文献&ウェブサイト

今月の表紙メッセージ

大海原へ！

◎ 2019年度から、高校の学習指導要領の改訂に伴う移行措置の1つとして、1年生の「総合的な学習の時間」は「総合的な探究の時間」に改められました。ただ、教科指導と比べて明確な指導法や教科書がない探究学習の指導に、戸惑いを感じている教師もまだ少なくないようです。探究の対象として設定される課題は生徒の数だけあり、課題へのアプローチや問題解決の方法も1つとは限りません。それはまるで、果てがなく、どこに向かうのか分からない、大海原へ漕ぎ出すようなもの。しかし、どこにたどり着くのか分からないゆえ、生徒をワクワクさせる学びになりえます。そうした学びに挑戦する生徒に寄り添えるかどうか、教師には求められるのではないのでしょうか。生徒とともに探究の大海原へ、いざ！

『VIEW21』高校版
編集長 柏木崇

26 改革事例から導く！「学校教育デザイン」を描く道標

26 富山県立砺波高校

誰でも参加できる委員会を活用し、ボトムアップで資質・能力の育成を目指す

30 主体的・対話的で深い学びへ 実践 アクティブ・ラーニング

30 情報

北海道・私立札幌龍谷学園高校 相蘇孝哉

ICT活用とグループワーク、他教科との融合で、情報化社会を生き抜く力を育む

34 現代文

埼玉県・私立開智高校 (開智学園 高等部) 加藤克巳

説明的文章の論理展開図の作成を通じた生徒同士の学び合いで論理的思考力を育む

38 指導変革の軌跡

38 静岡県立焼津中央高校

若手教師を中心とした学校改革

3年間の体系的な指導計画を策定し、生徒の自律的な学習意欲と進路意識を醸成

42 兵庫県立川西明峰高校

ESDを軸にした学校改革

ユネスコの精神にのっとった学校改革により、生徒が自分に誇りを持つ学校に

46 改良！ 指導ツール ビフォーアフター

3年生 2学期 志望校検討会資料

50 学校を飛び出し、学びを巡る 高校教師 study-tour

小学校の外国語活動

思わず自分の考えを伝えたい課題を通じて、考えて話す力を育む

52 大学生による高校生のための 大学の学び 最新ナビ

52 神戸大学 海事科学部

海に関する様々な領域の学びを通じて、国際海事社会で貢献できる人材を育成

54 上智大学 総合グローバル学部 総合グローバル学科

複合的な視点で、地球規模の問題解決に貢献できる人材を育てる

56 これからの会議・研修のあり方、つくり方

実践者に聞く！

新潟県・私立北越高校

「教師」という学校の宝から学ぶ、教師による教師のための研修

68 Reader's VIEW

巻末 教師を育てた言葉たち

「雲上蒼天」 長崎県立対馬高校 田川耕太郎

<https://berd.benesse.jp>

本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます。

印刷/(株)協同プレス 製本/日宝総合製本(株) 編集協力/(有)ベンダコ 執筆協力/中丸 満、二宮良太、長谷川教 撮影協力/荒川 潤、川上一生、高橋龍次、福山 哲、ヤマグチイッキ
*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。
*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。
©Benesse Corporation 2019

その時、教師は



新学習指導要領への移行措置の1つとして、2019年度から、高校1年生の「総合的な学習の時間」は「総合的な探究の時間」に改められ、新学習指導要領にのっとった教育活動が行われている（「総合的な探究の時間」の解説は、本誌2018年8月号P.4～7を参照）。ただ、探究学習において、教師は生徒にどのようにかわればよいのか、どんな役割を果たせばよいのか、悩む教師はまだ少なくない。そこで今号の特集は、探究学習に見る、これからの教師のあり方をテーマにお送りする。



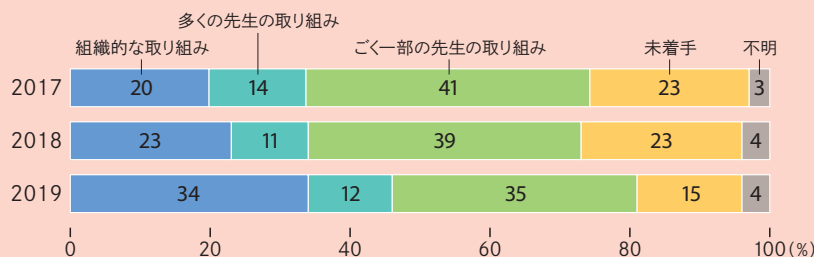
普段の授業なら出てこないような突拍子もない発言に直面した時、どう対応するのか？
横道にそれていそうな、冗談にも聞こえる生徒の言葉を前に、
その時、教師は**どんな表情を見せるのか。**



探究学習の課題設定のために、授業後もずっと話し合いを続ける生徒の言葉に耳を傾けている時、
ある疑問が立ち上がった。この疑問を生徒に言うべきか、否か。
その時、教師は**何を考え、どう判断したのか。**

DATAに見る“今、教師は”

●教科の授業以外での探究学習の実践状況



教育・入試改革が具体化・具現化していく中で、教科の授業以外でも探究学習を実践する学校・教師が増えてきている。

探究学習

ドキュメント **探究する教師たち** p.4

CASE 1 見通しが立ちにくい教育活動での支援のあり方を模索する

長崎県・私立純心中学校・純心女子高校
森 俊雄、大坪亮平

CASE 2 自分自身に向き合う環境を整える

東京都・私立かえつ有明中・高校
大木理恵子

対談 **教師に求められる探究マインド** p.12

東京都・私立かえつ有明中・高校 佐野和之
長崎県・私立純心中学校・純心女子高校 植本六秀

学校事例 **全校体制での推進に向けて** p.16

兵庫県立加古川東高校

レポート **世界的な潮流** p.20

「地方創生イノベーションスクール2030第2期 (ISN2.0)」
第4回研究会

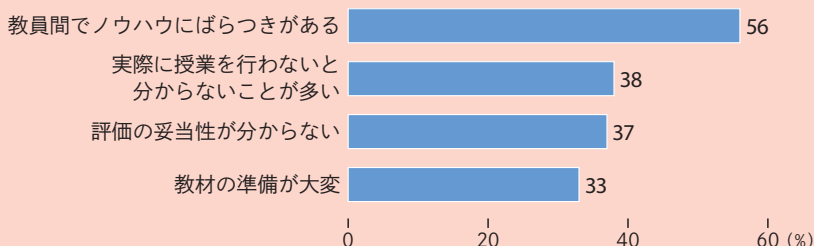
付録

探究学習お役立ち文献&ウェブサイト p.24



生徒がどのように自分に向き合い、
そして、どのようにしてコンフォートゾーンから
一歩踏み出そうとしているのかを敏感にキャッチするために、
私たち教師にも越境が必要だと気がついた。
その時、教師は**何を生徒に語ったのか。**

● 「総合的な探究の時間」について課題に感じていること



探究学習では、これまでの教科指導とは異なる指導のスキルやスタンスが求められるため、指導の足並みをそろえにくいことに課題を感じている。

出典 / (株) ベネッセコーポレーション教育情報センター「教育・入試改革対応に関する調査」(2019年) 全国の高校へアンケート実施。有効回収数は約1,400校。



探究学習に取り組む生徒にどのように寄り添い、彼らをどう支援するか。探究学習における生徒へのかかわり方を、多くの教師が模索している。もがき、苦しみながらも自らのありようを見いだそうとしている2校の教師の今を追った。

CASE 1 見通しが立ちにくい教育活動での支援のあり方を模索する

目の前の生徒とともに 「自分らしい探究」を追究する

長崎県・私立純心中学校・純心女子高校 森 俊雄、大坪亮平

課題設定ができないのは、モヤモヤを追究していないから？

「本当にこれは、このメンバーで取り組みたい課題なの？」と問う森俊雄先生。

「……」と返す言葉に詰まってしまった生徒たち。

「……みんなが興味を持って取り組める課題って、どういうものなんだろうね。これだ！というものがみつかるというね」という森先生の問いかけに、生徒たちは考え込んでいる様子だった。

2019年3月の探究プロジェクト開始からおよそ5か月が過ぎた8月末、森先生と大坪亮平先生が受け持つ約30人の生徒たちは、教育、心理、経済、環境などの領域別にチームをつくり、探究学習に取り組んでいた。活動が一区切りを迎える10月中旬まで残り2か月足らずとなったが、多くのチームは、この時点でも課題設定に苦しんでいた。

少し調べればすぐに結論が出そうな課題を設定しようとする生徒を見て、森先生、大坪先生は、当初は、知識の少なさが原因だと考えていた。だが、これで進めていこうと思

える課題にたどり着ける生徒と比較して、知識の量にそれほどの差があるようにも思えなかった。

大坪先生は、「自分たちが納得できる課題に到達できない生徒は、自分たちの中のモヤモヤに向き合いきれていないのでは」と考えるようになったという。

「私が受け持つ2チームは、環境問題という領域で課題を考えています。話し合いの過程では、汚染された地球を捨ててほかの惑星に移住する計画や、環境問題におけるマスマディアのあり方など、ユニークな観点での意見が出てきます。それなのに、なぜか最後は『温暖化』という

長崎県・私立純心中学校・純心女子高校

◎「清く・かしく・やさしい女性に」を教育方針として、カトリックの精神に基づき豊かな人間性を育む教育活動を展開。英語教育にも力を注ぎ、グローバルに活躍する女性を育成する。近年は、企業などと連携し、「正解が分からない問題」を多面的に考える探究学習も積極的に展開している。

◎設立 1935（昭和10）年

◎形態 全日制/普通科/女子

◎生徒数 1学年（高校）約180人

◎2019年度入試合格実績（現浪計）

国公立大は、筑波大、島根大、佐賀大、長崎大、北九州市立大、長崎県立大などに21人が合格。私立大は、青山学院大、上智大、中央大、津田塾大、長崎純心大などに延べ141人が合格。

◎URL <http://www.r-junshin.ed.jp/>

純心女子高校の探究学習

共通のメインテーマの下、チームや個人で課題を設定

同校の「探究プロジェクト」は、高校2年生、3年生を対象に、3月から10月までの約8か月間行われる。生徒はA、B、Cグループのいずれかに所属して活動する。Aグループは、「探究プロジェクト」に積極的に参加したいと希望した生徒から成り、チームで協働する。他チームと進捗状況を共有しながら進める。Bグループは、Aグループのように進捗状況などは共有しないが、チームで探究学習を進める。Cグループは、個人での探究学習となる。森先生、大坪先生は、Bグループを担当している。



メインテーマ「あなたはどんな未来を描きたいか」の周りに、すべてのチームや個人の探究テーマが記され、19年度の同校の「探究マップ」が完成する。



長崎県・私立純心中学校・純心女子高校 森 俊雄 もり・としお
教職歴 13 年。同校に赴任して 13 年目。数学科。進路指導部。

「課題設定に至らない生徒の中にも、思考を深めている生徒はたくさんいます。さらに『自分はどうな大人になりたいのか』と将来のキャリアにつなげている生徒もいます。そこに既に価値があることを伝えたいと思っています」

事象の枠に収まってしまいます。温暖化について説明する書籍やウェブサイトを数多くありますから、言語化しづらい自分の思いや疑問を深めることよりも取り組みやすい情報収集などを優先してしまっている気がします」（大坪先生）

意識に折り合いをつけているからかもしれないと、森先生は考えている。「時間に限りがある中で、チーム全員が取り組める課題はこのあたりだろうと妥協して決めているようなところもあると思います。せっかくだから、興味・関心が異なるメンバーがそれぞれの考えや知識を粘り強く突き合

わせて、みんなが心から『これは面白そうだ！』と思える課題にたどり着ければよいのですが……」（森先生）

モヤモヤに価値があったことを生徒に気づかせたい

森先生、大坪先生にとって最も身近な探究学習は、先輩である榎本六

秀先生が17年度から取り組んできた活動だ。それは、希望する生徒が企業と連携し、社会問題の解決案を提案するというものだったが、発表時の生徒たちの姿を見て、「高校生はここまでできるのか」と2人は感嘆した。だが、課題の設定を生徒自身が行うなど、進め方が異なる今年度、生徒に同じ成果を求めるのは難しく感じている。それ以上に、教師である自分たちが成果発表にこだわってしまうことで、生徒が教師の期待に応えようとつじつま合わせのような発表をして、中途半端な達成感を味わわせることは避けたい……





長崎県・私立純心中学校・純心女子高校 **大坪亮平** おおつぼ・りょうへい
教職歴9年。同校に赴任して9年目。生物科。進路指導部。

「温暖化から家庭の電力消費量の話になった時、ある生徒が『中学校で習った公式が使えるよね。今度、中学校の時の教科書を持ってこようよ』と言いました。探究学習と教科学習の関連に生徒が気づいた瞬間に感動しました」

森先生と大坪先生は、「成果の発表に重きを置かず、納得するまで課題を追究させ、苦しんだ過程を語らせよう」と考えるようになった。

実は、今年度の探究プロジェクトが始まった時、2人は榎本先生から、「希望者だけが参加してきたこれまでと異なり、今年度の参加者は、探究学習に強い関心を持っている生徒ばかりではないのだから、成果発表ありきで考えなくてもよいと思う」と、助言を受けていた。実際、生徒の中には、課題設定にたどり着かないまでも、興味や疑問が少しずつ深まっている者が確かにいる。それなら、自分が悩んできたことや、考えが変わったり深まったりしたことに価値を見いださせることもできるのではないかと。森先生、大坪先生は、夏季休業明けの最初の探究プロジェクトの時間で、生徒に「納得いく課題にたどり着くことを1つのゴールにしよう」と説明することにした。

「2学期からは、課題設定と並行して、これまで話し合ってきたこと、調べてきたことを俯瞰しながら、自分たちの考えの変化や深まりも可視化させていきます。生徒たちの『苦労した』『モヤモヤした』時間の中



から、『実はこれだけ成長していた』という成果を見いだす支援をしていきたいです」（大坪先生）

2学期最初の授業では、夏季休業中に調べてきたことをチーム内で共有しながら、これまでの活動の足跡を振り返った。

「『これまでの話し合いの記録を見て、最初は自分の視野が狭かったことに気がつきました。物事を考える時は、意外な視点も含めて多角的にアプローチすべきだと思いました』と語る生徒がいるなど、多くの生徒が内面的な成長を自覚していました」（大坪先生）

見通しが立ちにくい 探究学習での教師の役割とは？

夏季休業を経て、自分が探究したい課題やそれに決めた理由を熱く語る生徒が増えてくるなど、生徒の変化や成長が少しずつ見えてくる中、森先生、大坪先生が痛感するのは、「見通し」を立てることの難しさだ。

「教科の授業であれば、この時期までに生徒にここまでの学力を身につかせよう、そのためにこんな指導をしよう」と、見通しを立てやすいものです。それは、問いを投げかける主体が私たち教師であるからでしょう。一方、探究プロジェクトでは、生徒がいつ、どういった状態になっているのかを見通すのは、非常に難しいです。それは、生徒自身が問いを立てなければいけないからだと思います」（大坪先生）

探究学習において、課題設定につながる問いを立てようとする生徒には、教師はどのような支援をすればよいのか。森先生、大坪先生は、まさに教師としての探究の道を歩きながら、その答えのヒントを生徒から受け取っている。

「児童虐待の問題に関心を持つ生

徒が集まったチームは、課題を決めようと、探究プロジェクトの授業後もずっと話し合っていました。そばでその話し合いを聞いていた私は、『理想の状態を実現するためには、何をすればいいんだろうね』と、つぶやきました。それは、私が率直に疑問に思ったことでした。しばらくして1人の生徒が、『法律を整備すれば、児童虐待は減るはず』と言いました。すると別の生徒が、『でも、日本よりも法整備が進んでいるのに、虐待が多い国があるよ』と言いました。『そうなの?!』『なぜ?』と生徒たちがさうらに話し合い、考え込む様子を見て、私はとてもワクワクしました。今ではそのチームは、児童虐待について私にいろいろ教えてくれるほど、様々な視点で課題を深掘りしています。私がつぶやいた疑問は、そのチームの今の状態をつくる1つのきっかけになったと思います。私は見通しを持って生徒に、その疑問を投げかけたわけではありません。ただ、生徒の話聞き、気づきや疑問を率直に伝えただけでした」（森先生）

「探究プロジェクトにのめり込んでいる生徒をよく観察していると、『そんな冗談を!』と言いたくなる

ような突拍子もない発言をすることがあります。そして、教科の授業では出てこないような発言が、ほかの生徒にとっての予想外のヒントとなっていることもあります。そうした場面を目にすると、私が果たすべき役割は、何かを示すこと以上に、何でも自由に発言できる場をつくり、『面白いね!』『それって、どういうこと?』と、一緒に楽しむことかなと思っています」（大坪先生）

今年度、初めて取り組んでいる探究プロジェクトについて、「楽しみよりも不安の方が大きく、底が見えない海に飛び込んでいる思いだった」と森先生は率直に語る。

「底が見えなくて不安だから、楢本先生から少しでも学ぼうとしてきました。でも、いつの間にか、先輩の考えからずれることは正解からずれてしまうことだといった意識になつていたのかもしれない。成果を急がず、私自身が本質思考になることで、自分らしい探究をつくりたいと、今は思っています」（森先生）

「本場にこれが、生徒と取り組みたい探究なのか」。森先生、大坪先生はその問いに、今も生徒とともに向き合っている。

自分なりの「探究」を 試行錯誤の中で見いだしてほしい

長崎県・私立純心中学校・純心女子高校
楢本六秀先生



森先生、大坪先生は、探究というものを理解しようとしているし、さらに探究学習を通して生徒そのものをよく理解しようとしています。ただ、探究を理解するためには何をどうすればいいかということに、とらわれているきらいもあります。「やってみただけで違った」を繰り返すことで、「私だからこんな力を生徒に育める」といった、自分なりの探究を見いだしてほしいと思います。



森先生、大坪先生の
メンター・楢本先生が
12ページに登場します



CASE 2 自分自身に向き合う環境を整える

多様な他者と協働する価値を、 自分の内面を開示しながら生徒に伝える

東京都・私立かえつ有明中・高校 大木理恵子

生徒に自分の内面を開示し、「ありのままのよう」と伝える

「私は、自分の内面を表に出すのは苦手です。でも、今日は、夏休みに気づいた本当の自分について、勇気を出して皆さんにお話しします」

2学期最初のプロジェクト科（学校設定科目）の授業で、2年生を前に大木理恵子先生は語り始めた。プロジェクト科では、興味・関心の近い生徒同士がグループになって、取り組んでみたいことを自由に課題として設定し、協働的に探究学習を進めていく。課題設定では、自分の興味・関心に向き合い、さらにグループのメンバーの興味・関心にも向き合うことになる。だが、そもそも自分の「本当の興味・関心」を見つけていることは簡単なことではない。興味・関心があると思っけていても、それは思い込みであるかもしれないし、何か理由があつて本当の興味・関心から目を背けていることもあるかもしれないからだ。そして、異なる価値観を持つメンバーがお互いを尊重し合い、協働を続けていく必要もある。そこでプロジェクト科では、自分や他者がどのような存在なのか

をじっくりと生徒が考えるワークショップを実施している。この日は、生徒が対話を通して、各々が大切にしているものに気づき、グループとして探究学習を進めていく上での土台を築くことをねらいに活動した。

「夏休み前に、皆さんには、未来をつくるために、今の自分のままで居心地よく過ごせる『コンフォートゾーン』から一歩を踏み出そうと話しました。そのあと実は、『コンフォートゾーン』からの越境は、生徒だけではなく、教師にも必要だから、夏休みに自分たちもそれぞれ一歩を踏み出す体験をしよう」と、先生同士でも話をしたんです。だから今日

東京都・私立かえつ有明中・高校

- ◎嘉悦孝が日本初の女子商業学校「私立女子商業学校」として創立。獲得すべき知識・技能を明示したアクティブ・ラーニングの導入や、答えが1つではない課題解決型授業「プロジェクト科」におけるルーブリックの設定、体系づけられたグローバル教育など、先進的な教育を展開する。
- ◎設立 1903（明治36）年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約180人（高校1年生）
- ◎2019年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、千葉大、東京工業大、東京大、横浜国立大などに14人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、中央大、東京理科大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ343人が合格。
- ◎URL <https://www.aikai-kaetsu.ac.jp/>

かえつ有明中・高校の探究学習

常識から自由になって
真に探究したいテーマを探す

学校設定科目のプロジェクト科では、これからの社会で求められる資質・能力を育むため、講義形式の授業ではなく、生徒たちが能動的に学習に参加するアクティブ・ラーニングを数多く実践している。「学び方を学ぶ」「自分軸を確立する」「共に生きる」の3つの軸を高1段階からじっくりと育み、思考を縛る常識や社会通念を剥ぎ取る。その上で自分の興味・関心に応じて、多様な人たちと主体的に対話を重ねながら、グループで取り組む探究テーマを模索していく。大木先生は、2年生のプロジェクト科を担当。

プロジェクト科の学びの3つの観点

3つの観点	学び方を学ぶ	自分軸を確立する	共に生きる
意図	「学び」のパターンや対話的・創造的アプローチを習得する	自分の大切にしている思いに気づくことで、他者のつくった評価軸に縛られなくなる	だれにとっても安心安全な場を創る中で、存在そのものがリスpekの対象だと気づく
指導の具体例	パターン・ランゲージ(*)やシステム思考などのワークショップを通じて、他者の「多様な学び方」を学び、創造的学び手となる	ペアインタビューや表現活動を通じて、自分自身でも整理できていない自分の思いや価値観と向き合う	互いの感情に意識を向けたコミュニケーションなどを感情や思いを大事にしつつ、相手に寄り添っていく

*成功している事例の中に繰り返し見られる暗黙知を言語化し、他者と共有していく営み。



東京都・私立かえつ有明中・高校 **大木理恵子** おおき・りえこ
 国語科。高校2年生のプロジェクト科の授業を担当。

自分の過去の体験を語り、「自分らしく、みんなと探究に取り組みたい」と生徒に語りかける大木先生。生徒たちは、大木先生の心からの言葉をどのように受け止めたのかを語り合いながら、さらにお互いを理解していった。

は、これから、私が夏休みに自分について考え、気がついたことを皆さんに話したいと思います」

大木先生が生徒に語ったのは、幼い頃のある体験から、「自分ばかりではない人間だ」「周りから認められる存在にならなければいけない」といった思いに縛られてきた自分に気づいた……という内容だった。苦しんでいる自分に気づかないふりをしていたし、くだらない自分を安心させるために、無意識にほかの人のことを見下すこともあった……およそ10分間にわたって自身の内面について語った後、大木先生は自分を感じと見つめる生徒たちにこう語った。

「弱さを含め、ありのままがいいんだと自分を受け止めて初めて、他者の存在を受け止められるのだと思います。私も、みんなと一緒に、本当の意味で自分を解放し、自分らしくみんなの探究学習にかかわってきたいと思っています。勇気を出してみんなに話してよかったです」

「ただ聴く」マインド、

グループ内の関係性を強める

今度は、生徒たちが自分の内面を



見つめる番だ。大木先生は、「今後、協働的に探究学習を進めていくために、仲間の助けを借りながら自分を理解し、お互いを受け止め合う感覚をみんなに味わってもらいたい」と生徒に語りかけ、「1人ずつ順番に、自分の今の心境を語ってください。そして、それを聴く人は、評価や判断をせずに、ただ集中して聴いてください」と説明した。

プロジェクト科では、グループ内の関係性を強めるために、「聴く」という行為を重視している。プロジェクト科の授業づくりにおいて中心的な役割を担い、この日の授業に

も大木先生のサポート役として参加した佐野和之先生が、「聴く」という行為がグループでなぜ大切になるのかを補足的に説明した。

「自分が『聴く』ことで、話している人がありありと幸せになっていくような貢献的な『聴き方』をしてください」

生徒たちはグループ内で順番に、大木先生の話聴いて感じたことや、自分の夏季休業中の越境体験を

プロジェクト科でどのように生かしていききたいかなど、今の自分の気持ちを語った。それを聞いた生徒は、

自分が感じたことを伝え、さらにそれを受けて、先に話した生徒が、「どんなふうに話を聞いてもらえたと感じたか」を語った。語り、聴くという行為を丁寧積み重ねることで、人間関係が深まっていく。

生徒の対話はさらに続いた。大木先生は生徒に、夏季休業中の残念



◎グループのメンバーの経験を聴き、その時話し手にはどのような気持ちがあったのか、話し手はどのような価値を大切にしている人なのかを考える。感情や価値につながるキーワードが書かれたシートやカードを使いながら、対話を進めていった。



だった経験、悲しかった経験をグループのメンバーに話してほしいと呼びかけた。

「ネガティブな感情で心が揺れ動いた経験を、無理せずに言えるもので構わないので、グループのメンバーを信じて話してもらえますか。メンバーに聴いてもらい、感じたことをフィードバックしてもらおうと、自分が大切にしている価値観に気づかせてもらえるかもしれません」

グループのメンバーが語る夏季休業中の経験を聴きながら、そこにはどんな感情があつたのか、そのような感情を持つメンバーはどのような価値を大切にしている存在なのかをお互いに考えていった。対話を通して、自分が、メンバーがどのような存在なのかを探究していく。「今は自分に自信がないけど、こうやって悩む自分を尊敬できる時が来ればいいなあ」と思いを語る生徒の声が聞こえてきた。

「皆さんの中には、メンバーの助けを借りたことで、自分が心の奥底で大切にしているものに気づいた人もいます。自分が大切にしている感情や価値を意識して、これからのプロジェクトに取り組んでほし

いと思います」(大木先生)

教授者ではなく伴走する人として生徒とともに越境する

大木先生がプロジェクト科を担当して2年目。昨年度は、佐野先生とのTTT(チームティーチング)が多かったが、今年度は大木先生が1人で授業を行うケースが増えた。

「プロジェクト科の授業での生徒の悩みや不安は、大抵『本当にこのテーマでよいのだろうか』『そもそも自分が何をやりたいのかが分からない』といった課題設定に関するものです。そうした悩みや不安を持った生徒に対して私は、生徒が自分自身で考えを整理できるように、『なぜ、そう思うようになったんだろうね』『あなたが大切にしている気持ちはそれなのかな』と、生徒の思いが湧き出ることを願いながら話を聴くようにしています」

教師として十分なキャリアを持つ大木先生だが、プロジェクト科を担当するようになって、「生徒が今、どんな状態にあるのかを敏感に察知できるようにになりたい」と考えるようになったという。

相手の内面を深く
理解できるようになりました

福永理紗さん(2年生)



今日、大木先生は私たちに、自分の内側にあった、自分でもそっと横に置いていた弱い部分を話してくださいました。私たちに信頼して話してくださいましたのだと思いますし、「私たちは、大木先生のいいところも知っているよ!」と言いたい気持ちになりました。大木先生のことに限らず、以前は、ほかの人を非難する発言を聞くと、「そんなのか」と安易に受け入れていましたが、今は「それは短所ではなく、長所でもあるよね」と、受け止められるようになりました。プロジェクト科で、お互いの話を聴き、相手を深く理解するような時間を積み重ねてきたからかもしれません。

私のグループは、探究する課題がまだ全く具体化していません。でも、メンバーと話す中で、「みんな、身近なものにアプローチすることが向いている気がする」という点には、共通の理解があります。正直どんな課題が設定されるのかは想像がつかず、プロジェクトとして完成しないかもしれませんが、今は見えていないゴールや、自分たちなりの答えにたどり着ける可能性もあります。だからこそ、これからが楽しみです。

「プロジェクト科を通して、教師の言葉や働きかけによって、生徒の変化の度合いは大きく変わるのだと改めて実感しています。ただ、まだ私は、生徒が本当の思いを語るのを待たずに、生徒を急かしてしまいうことがあります。そうした時、探究学習は浅いところで止まりがちです。佐野先生からは、『それは生徒の問題ではなく、大木先生の問題ではありませんか?』と指摘されてハッとすることがあります」

プロジェクト科で生徒が設定する課題は多種多様だ。それが学術的ではなくても、生徒にとって本当に探究したいこと、大切なことであれば、価値のある探究学習が実現すると大

木先生は考えている。

「以前、『ブレイクダンスを友人に教える』という課題を設定したグループがありました。正直、その課題を聴いた時、単なる遊びではないかと思いました。しかし、発表会では、ダンスを披露した上で、グループの中でどんな貢献をし合い、人間的にどのように成長してきたのかを見事に言語化していて、私は『これがプロジェクト科なのか!』と感動しました。その時、探究学習での教師の役割は、生徒がのめり込める環境をつくることだと確信しました」

教師が「導く」というスタンスのままでは、生徒による真の探究学習は生まれないと大木先生は語る。

「教授者ではなく、伴走する人として生徒と語り合い、生徒の状態を察知して学びの場を整えることが、これからの教師に求められる役割だと思っています。その点では、私にとって佐野先生は、新たな目標です。これまで、『生徒の存在そのものをリスペクトする』という佐野先生のあり方から、様々なことを学びました。『教師が信頼すれば、生徒は想定を超えて成長する』という信念を持って、これからも教師として、1人の人間として自分も成長していきたいと思っています」

同校では、生徒も教師も、「ありのまま」を互いに受け入れた上で、越境を試みようとしているのだ。

大木先生の
メンバー・佐野先生が
12ページに登場します



「自分が変わろう」という覚悟が、
生徒を強く引きつける

東京都・私立かえつ有明中・高校
佐野和之先生



大木先生は、豊かな経験をお持ちで、国語の授業でも、アクティブ・ラーニングをいち早く実践していました。探究学習については、まだ「自分でできるだろうか」「これでよいのだろうか」という不安もあるようですが、それでも「自分が変わらないと生徒は成長しない」と、試行錯誤されています。だからこそ、生徒は誰よりも大木先生のことを信頼していると感じます。

答えが1つではない問いを自ら立て、心からのめり込める課題として探究する生徒に、
教師はどのようにかかわっていけばよいのか。
いち早く探究学習を通してこれからの教師のあり方を考えてきた2人が語り合う。



対談

教師に求められる
探究マインド



生徒の悩み、もがく経験に、 1人の人間として敬意を払う

東京都・私立かえつ有明中・高校
佐野和之

長崎県・私立純心中学校・純心女子高校
つちもとむつひで
槌本六秀



さの・かずゆき 教職歴26年。同校に赴任して6年目。副教頭。理科担当。生徒自身で設定した課題に取り組む学校設定科目「プロジェクト科」の設置など、同校の「新しい学び」をつくる中心的存在。心理学的コミュニケーション理論や、リーダーシップ能力開発、チームビルディングなどの講演・研修を全国の学校で行う。

つちもと・むつひで 教職歴23年。同校に赴任して24年目。進路指導主事。理科担当。2010年度からキャリア教育の一環として探究学習を授業に取り入れ、17年度に大手総合建設企業と連携して、「これからの社会と未来の建造物」を考える取り組みを行うなど、同校の探究学習をけん引してきた。

探究学習に携わる教師に 求められるスタンスとは

槌本 生徒の探究学習を見取るスタンスを考える上で、自校の探究学習で重視するのは課題設定なのか、問題解決のプロセスなのか、それとも解決できたことなどの成果なのかを教師間で議論しておくことが重要です。本校では、課題設定や問題解決のプロセスを重視していますが、一方で、それらを重視するほど、「こうすれば形になる」といった、ゴールまでの工程を逆算し、生徒を導くことが難しくなります。本校の森先生、大坪先生にとって、先に探究プロジェクトに取り組んだ私の事例も、あくまで参考にしかりません。指導を逆算することが難しく、生徒や同僚、他校の教師とも話をしながら、教師自身が、今の自分と目の前の生徒にとってよりよい探究学習の進め方を模索するというのが、探究学習と教科学習の大きな違いだと思います。

佐野 教師が自分の力で模索し続けるためには、「こうなれば形になる」「これが成功だ」といった常識や思い込みをいったん手放してみる



ことも大切だと思っております。本校の大木先生は、自分の中にある、常識や思い込みをつくっているものを、生徒の前で赤裸々に出そうとしました。自分の中に「こうあるべき」といった思い込みが存在していることを自覚した時に、今までとは違うあり方を選択するチャンスが生まれま

ことになるかもしれません。でも、私はそれでもよいと思うのです。変化するタイミングは人それぞれですし、自覚し、悩むことで変化するチャンスは続くのですから。ただ、教育のあり方が過渡期を迎えている今、変わるチャンスが自分にあることは、どの教師も自覚しておくべきだと思います。

植本 今年度、初めて探究プロジェクトを担当し、悩みながら生徒とかわっている森先生、大坪先生ですが、悩んでいるからこそ、生徒は両先生がそのままの姿でかわってくれているのだと感じ、信頼しているのだと思います。私も、初めて探究プロジェクトに取り組んだ時、参加していた3年生のある生徒に、「正直なところ、探究プロジェクト、どうだった？」と尋ねたことがあります。私同様に戸惑いながら活動していた生徒の答えは、予想外にも「1年生の時からやりたかった」でした。私には、必ずしも楽しそうに参加していたようには見えなかった生徒たちでしたが、探究学習の価値は分かっていたのでしょう。実は生徒は、学びとは何かを本質的には理解していますし、思考が深まることも



森先生、大坪先生とは、「高校の探究学習の本質」をよく語り合います。私たちが大切にしているのは、物事的前提について、「本当に？」と、生徒に問い直すこと、そして、「人とかわっていくことには意味がある」と、人生において他者と協働する価値に気づかせることです。

▶ 植本先生が教科指導で行う探究学習の実践について、本誌2018年8月号の特集でご紹介しています。

実感し、それを楽しんでいます。だからきつと生徒は、森先生、大坪先生との探究学習を楽しんでいるのだらうと思いますし、両先生は、生徒の学ぼうとする気持ちを、これからも信じていけばよいと思うのです。

なぜ、探究学習では

「聴く」ことが大切なのか

佐野 人は、悩みや不安を抱えてい

ても、それを他者に語り、しっかりと受け止めてもらうことで、前向きな気持ちになれることがあります。そのため、本校では、プロジェクトの活動の中で、相手の話をしっかりと「聴く」ことを通して、他者に貢献できるようにする体験を積み重ねています。

植本 聴いてもらうことで前向きになれるということは、進路指導における面談などでもよくあることです

よね。生徒は自分の中にあらかじめ答えを持っていて、こちらはただ話を聴いているだけにもかかわらず、生徒は「自分の考えを整理できた」と言いつて帰るといことはよくあります。

佐野 生徒が相談に来た時、私たち教師が、「この生徒は、こういうことが言いたいのだろう。だから、こういうことを言えばよいだろう」と想定してしまうと、生徒とのやりと

りは、その範囲内で収束しがちです。しかし、その想定をいったん外して、「ただ聴く」ことに徹していると、想定外のより重要な話が出てくることとがありますし、思いをすべて話すことで、生徒は自分で自分を整理できます。

榎本 探究学習における課題設定などで、生徒に「こうしなさい」と指示することはありますが、生徒が自分を取り組んでできたことや考えて



大木先生は、本校の「プロジェクト科」の立ち上げにもかかわった仲間の1人です。今までの自分を形作ってきた殻の中には取まらない活動に、時に戸惑いながらも、生徒とともに自分の殻を破ろうとひたむきに取り組む大木先生を、心から尊敬しています。



きたことを頭の中で整理できていないと感じた時は、「ここがつかっていないように思っけれど……」などと指摘することはあります。教えるというより、一緒に整理するという感覚です。

佐野 「聴く」ことは大切ですが、それは生徒に何も言わないということではもちろんありません。探究学習において生徒と語り合う中で、生徒に視野の狭さや情報の少なさを感じた時は、「こんな情報が足りない気がする」「この課題に実際に取り組んでいる人が、どんな思いを持っているのかを直接聞いてみたら、何か得られるかも」などと、生徒に自分の考えを伝えたり、「今のはこういうことかな?」といった質問をしたりするのは、生徒への貢献になります。ただ、「これを調べなさい」とは言いません。なぜなら、私が差し出したものが、その生徒にとって本当に必要なものかどうか分かりませんし、教師が先に判断や評価をしてしまうと、整理する機会を生徒から奪いかねないからです。提案はするけれど、それを選択するかどうかを決めるのは、あくまでも生徒自身です。仮に一步を踏み出せず、停滞



したとしても、どうすればよかったのかを生徒自身が考え、修正して次に生かせばよいですし、そのプロセスが、探究学習では最も重要なのではないのでしょうか。

榎本 「なぜ、この課題にしたの?」と生徒に理由を聞いてみても、考えがまとまっていなかったり、説明が言葉足らずだったりして、少々話を聞いたくらいでは、よく分からないということはしょっちゅうです。それでも、生徒の本当の思いが見えてくるまで粘り強く聴いていると、生徒が私の想定とは違うことを考えて

かえつ有明中・高校の教員研修

かえつ有明中・高校では、教師は対話を通じて生徒の探究学習を支援していく。そのため、感じていることを率直に表現でき、自己と他者を尊重できる関係を築くことが教師と生徒双方に求められる。

そこで同校では、教師が自己と他者を理解することを通して、教師のチーム力を高める教員研修を実施している。

◎教員研修でテーマとなった学びの理論や手法の一例

- **U理論** 過去の延長線上にない変容やイノベーションを、個人やチーム、組織やコミュニティー、社会で起こすための原理と実践手法
- **NVC (Non Violent Communication)** 相手とのつながりを持ち続けながら、お互いのニーズが満たされるまで話し合いを続ける共感的コミュニケーションの手法
- **パターン・ランゲージ** 対象領域における「経験則 (成功に潜む共通パターン)」を「言語化」して共有する方法

なお、同校では、上記のようなテーマの研修を、自校の教師だけでなく自校の生徒、他校の教師や保護者、学生や社会人などにも門戸を開いて実施しており、教師が多様な人々と学ぶ機会もつくっている。

「全然進んでいなくても、思考は深まっていく」ことに、いつか生徒には気づいてほしいと思いました。私たち教師は、生徒がもがくことを大切にするのであれば、「最近、生徒がこういう活動を始めた」「こんな提案ができるようになった」などと、生徒の変化や挑戦を語り合いたいと思います。そうした対話の中でこそ、自校の探究学習の評価を共有することができ、探究学習の形骸化を防げると思うのです。

佐野 探究学習という学びについて、教師同士、生徒同士、そして教師と生徒でもっと語り合うことで、お互いの強みや弱みを安心して打ち明け合い、苦手なことは同僚や生徒



佐野 教師が生徒に質問したり、自分の考えを伝えたりする時に、それは生徒の考えを整理するための貢献だという立ち位置でいられれば、生徒への言い方が強いものになったとしても、生徒は、「先生、それは違

榎本 探究学習における課題設定は、1つの科目として成立するくら

探究学習で求められる教師と生徒のあり方は

うと思います」と、自分の考えを主張するはずですが、そもそも私たちは、自分が尊敬している人が話している時に、多少話の内容が分からなくなっても、「何を伝えようとしているのだろうか」と、真意を受け止めようとはしますよね。自分の尊敬する人に向き合う一方で、生徒の頑張りにも向き合いたいと思うのです。

大変なことだからこそ、生徒が課題設定に悩み、もがく経験は、成果物以上に価値があると思っています。以前、1人の生徒が私に、「課題設定について、昨日も2時間くらい考えたのですが、どうにも進みません」と言ってきました。私は生徒に、「しっかりとスタートラインに立ててよかったね。ここから探究学習が始まるよ」と返したら、「なるほど……」と考えながら去っていきました。たわいもない会話でしたが、「全然進んでいなくても、思考は深まっていく」ことに、いつか生徒には気づいてほしいと思いました。私たち教師は、生徒がもがくことを大切にするのであれば、「最近、生徒がこういう活動を始めた」「こんな提案ができるようになった」などと、生徒の変化や挑戦を語り合いたいと思います。そうした対話の中でこそ、自校の探究学習の評価を共有することができ、探究学習の形骸化を防げると思うのです。

に委ねることができればよいと思いますし、学校がそういった関係をつくる場になれば、社会も変わっていくはずです。そうやってこそ、学校はこれからも存在意義のある場であり続けると思います。

榎本 「先生たちは探究学習についてこんなふう考えているけれど、どう思う？」と生徒に問いかけ、これからの学びを生徒と一緒に考えていけるとよいですね。生徒や同僚と語り合いながら、生徒が何を考えたのかを丁寧に見取っていきたいと思います。



未経験な教育活動は、ベテラン教師でも不安を感じるものであり、その教育活動に意義があると理解していても、実際に取り組むことには抵抗があるものだ。ここでは、学校全体で探究学習を推進するにあたり、組織的な支援を行った学校の事例を見ていく。

指導上の不安・負担を軽減するとともに、 教師が意義を感じられる探究学習に

兵庫県立加古川東高校

理数科で取り組んできた 課題研究を全校に拡大

兵庫県立加古川東高校では、SSH（*1）の第1期の指定を受けた2006年度から、普通科のGS

コース（10年度に理数科に改編）で課題研究に取り組んできた。12年度の第2期からは、課題研究を行う対象を理数系の部活動で構成される自然科学部にも拡大。国内外の学会や国際シンポジウムへの参加、全国規模のコンテストでの最優秀賞の受賞など、生徒は多様な経験をし、実績を上げてきた。

17年度に始まった第3期からは、課題研究を普通科全体にも拡大し、全校を挙げて取り組んでいる。教育企画部長の西村雅永^{まさなが}先生は、その理由を次のように説明する。

「長年にわたるSSHにおける指導経験上、課題研究に取り組んだ生徒は、教科書の枠を超えて興味・関心の対象を広げたり、深く掘り下げたりするなど、学問の楽しさを味わっていました。そのため私たちは、すべての生徒に、同じ経験をさせたいと考えるようになりました。また、

理数科の課題研究の発表会を見た普通科の生徒たちから、『自分たちも課題研究をしてみたい』という声があがったことも、普通科への拡大の後押しとなりました」

同校の課題研究のねらいは、「育てるべき生徒像」（図1）の実現を目指し、生徒に生涯にわたって役立つ資質・能力を身につけさせることにある。課題研究の3年間の流れは次の通りだ。

理数科では、1学年の「課題研究基礎」などで探究スキルを習得し、科学の最先端のトピックを学んだ上で、2学年の「課題研究Ⅰ」で少数グループによる課題研究を1年間かけて行う。そして、3学年の「課題研究Ⅱ」では、生徒個々がそれまでの研究内容を論文にまとめる。また、3年間を通じて、英語で意見を伝え、質疑をする力を育成し、世界で活躍する実践的な英語力を身につけさせる。

普通科では、1学年の「探求Ⅰ」で、探究活動に必要な情報の収集方法や分析方法を学んだ上で、教師が示した大テーマ（部活動、塾の利用、SNSの使用など）に沿って、生徒はグループで具体的な課題を設定す

兵庫県立加古川東高校

◎旧制加古川中学校として開校。「自治創造」「明朗親和」を校訓に、「将来において『正解』のない社会を切り拓く人づくり」を教育ビジョンとして、「批判的思考力」「人間的魅力」を基に挑戦する勇気を育む。現在、SSH第3期目。

◎設立 1924（大正13）年

◎形態 全日制/普通科・理数科/共学

◎生徒数 1学年約320人

◎2019年度入試合格実績（現浪計） 国

公立大は、北海道大、東京大、名古屋大、

京都大、大阪大、神戸大、岡山大、九州大、

兵庫県立大などに323人が合格。私立大

は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、関

西学院大などに延べ478人が合格。

◎URL <https://www.hyogo-c.ed.jp/~kakohi-gashi-hs/>



進路指導部長
坂田充範
さかた・みつなり
教職歴38年。同校に赴任して15年目。



教育企画部長
西村雅永
にしむら・まさなが
教職歴35年。同校に赴任して15年目。

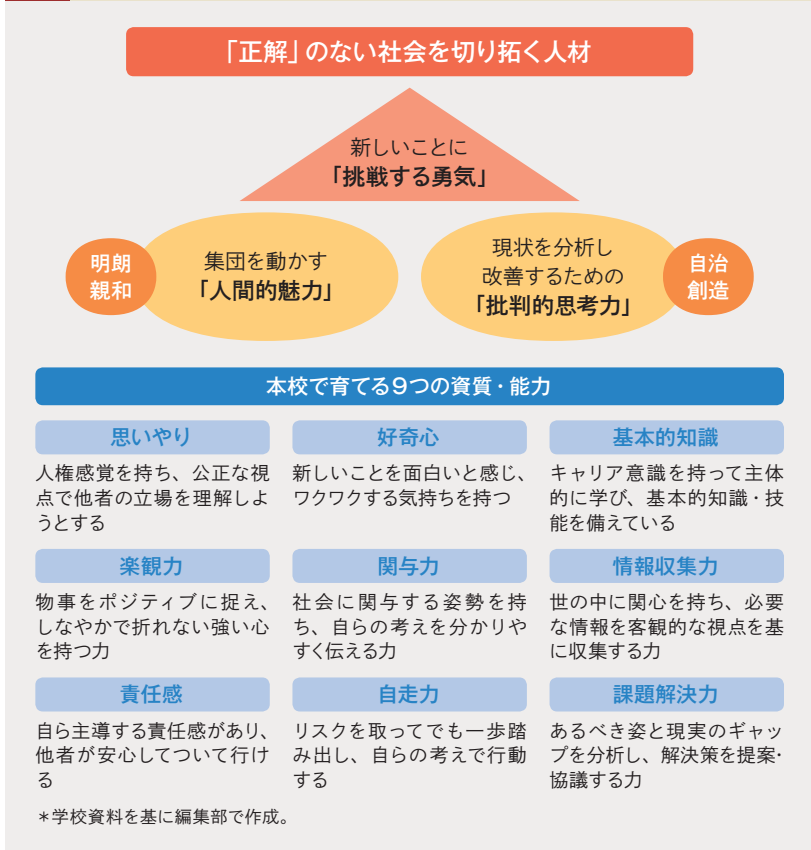


教育企画部
福迫徳人
ふくさく・のりひと
教職歴8年。同校に赴任して4年目。

る。そして、仮説検証のためのアンケート作成やその分析などを行い、探究活動のプロセスを一通り経験する。2学年の「探求Ⅱ」では、新たなグループとなり、それぞれ研究

*1 文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール。

図1 兵庫県立古川東高校の育てるべき生徒像



テーマを設定。中間発表会で、研究テーマと研究方法について他グループからアドバイスを受けてから、研究を開始。その後、発表原稿・ポスター作成↓発表↓論文作成の流れで探究活動に取り組む。3学年は、「探求Ⅲ」として、1・2学年の活動を踏まえて高校卒業後の学びを展望する「学びの設計書」を作成する。

普通科への拡大に伴い 教師への支援策を考案

課題研究の普通科への拡大は、同校にとって大きな転機となった。「探求」を統括する教育企画部が留意したのは、生徒が楽しく活動すること、さらに、教師に指導への不安を感じさせたり、負担をかけたらしめないようにすることだった。

「教科指導の経験が豊富な教師でも、探究活動の指導は未知の領域です。さらに、学習や指導の成果が数値化されづらいため、自分に指導できるのかといった不安や、仕事の負担増に対する抵抗感を持つ教師も少なくありませんでした。そこで、どうすれば普通科で探究活動の指導が円滑に進められるか、教師への支援について知恵を絞りました」（西村先生）

教師の負担を減らす工夫として考えたのが、「探求」の各時間の指導案を作成することだ。それは、取り組みのねらいと内容、進め方、時間配分、教材の使い方などを記したもので、それに沿って進めれば、未経験者でも指導できるようにした。教育企画部が素案を作り、実施初年度となる17年度の1学年団（現3学年団）と共有・検討した。

「どの教師も理解できる内容か、学年団の意向に沿っているかなど、当時の1学年団の先生方の意見を聞きながら何度も修正し、練り上げていきました。その結果、現場の声を踏まえた実践的な指導案ができたと思っています」（西村先生）

探究活動の指導は授業時間内のみ

と、厳密に区切ったことも、教師の負担感を軽減するための工夫の1つだ。放課後や夏季休業中などに、生徒が自主的に研究に取り組むことはあっても、教師が授業時間外に指導にかかわることは、基本的にはない。また、1・2学年ともに、「探求Ⅰ・Ⅱ」の成果の発表会を12月末までに終わらせることにした。そして、行事が過密になって教師の負担を増やすことのないように、ほかの行事の実施時期を考慮した年間計画を立てた。

1学年では、探究活動の授業の事前準備などを行う「探求委員」を希望制で生徒から募り、任命したことも、教師の負担感の軽減につながっている。担当教師から授業の流れを説明された探求委員は、その内容から、実際に教室で説明する。生徒に探究活動の趣旨を理解させるとともに、役割を与えることで、生徒の主体性や自己肯定感を高めるねらいもある。

1クラス3人のTTで、 相談し合いながら指導

教師の指導への不安感を軽減させ

ることを目的の1つとして行っているのが、生徒が本格的に探究活動に取り組む2学年の「探求Ⅱ」におけるTT（チーム・ティーチング）だ。1学年の「探求Ⅰ」と3学年の「探求Ⅲ」では、クラス担任が自分のクラスの指導を受け持つ。一方、「探求Ⅱ」では、1・3学年団以外の全教師が指導を受け持つ。各教室に3人の教師が入り、1人あたり2グループを指導する。教育企画部の福迫徳人先生は、そうした体制にした理由を次のように語る。

「担当グループが壁にぶつかった時、1人の教師では助言や判断をすることが難しい場合があります。教室内に複数の教師がいれば、すぐに相談し合えますし、場合によっては、1人の教師がほかの教室の教師に意見を求めに行くことも可能です。探究活動の経験の少ない先生にとって、心強い体制だと思います」

教科の知見を総動員し、生徒のテーマ設定を支援

「探究活動が深まるかどうかは、課題設定でほぼ決まると言われています。そのため、課題設定の段階の

指導に不安を持つ教師も少なくありません」（福迫先生）

そうした不安を払拭するために行っているのが、「テーマ検討会」だ。全クラス・全グループの研究テーマが出そろった段階で「探求Ⅱ」にかかわるすべての教師が人文科学・自然科学・社会科学の3分野に分かれて、生徒たちが設定したテーマは検証可能な内容か、先行研究はないか、時間内に取り組めるかという観点で、テーマの妥当性を協議する。

「教師自身の専門性と担当グループの研究テーマが一致するとは限りません。そのため、自分の専門外の分野を専門としている先生がいて、その分野で生徒が設定してきたテーマが妥当かどうかを協議してもらえらる『テーマ検討会』は、大変貴重な場ですし、その後の生徒へのアドバイスも、指導経験が少ない教師にとっては、探究活動の手法を身につける研修の役割も果たしていると言えます」（西村先生）

生徒の成長が見えたことで指導も前向きに

教師の負担感・不安感の軽減を目

指してきた同校だが、それでも探究活動の指導を初めて担当する教師は、教科の授業との差異に少なからず違和感を覚えたという。進路指導部長の坂田充範先生も、その1人だった。

「初年度は、生徒との距離感に悩みました。特に、話し合いが得意ではないグループでは、議論が進まず、私自身がストレスを感じてしまうことが少なくありませんでした」

戸惑いながらも指導してきてよかったと思えた瞬間が、18年12月に行われた「探求Ⅰ・Ⅱ」の発表会だった。

「初めはゴールが見えず、不安が大きかったですが、生徒たちの発表を見て、どういった意図を持って探究活動のカリキュラムが組まれたのか、よく理解できました。途中の指導がどれほど大変でも、生徒たちが生き生きとした表情を見せていたり、学校外の人に褒められたりしているのを見ると、すべての苦労が報われる気がします。生徒たちの成長が実感できてからは気持ちも楽になり、それからは、前向きに生徒たちにかかわることができるようになりました」（坂田先生）

生徒の成長が実感できたことで、

2年目以降は、多くの教師が前向きに指導にかかわるようになり、指導に工夫を加える意欲が生まれた。例えば、19年度の「探究Ⅱ」では、研究テーマの設定の際、各グループに紙と付箋紙を配り、ブレインストーミングをした上で意見を集約させた。話し合いが得意ではないグループでも、格段にスムーズに活動が進むようになった。

「ここは見守るべき、ここは背中を押してあげようといったように、生徒たちの状況に応じたメリハリのある指導ができるようになりました」（坂田先生）

毎時間の生徒の振り返りで指導の成果を可視化

教師が日々の取り組みにやりがいを感じるための工夫もしている。普通科の「探求Ⅰ・Ⅱ」では、毎回、生徒に活動の振り返りを行わせている。例えば、「探求Ⅰ」での振り返り項目は、「育てる資質・能力」（P.17図1）にひもづけされた「人任せにすることなく、自ら主体的にコツコツと取り組みましたか【自走力】」

「自分の言葉で、他の人に分かりやすく説明できましたか【関与力】」「メンバーと情報を共有し、協力して取り組みましたか【思いやり、責任感】」などだ。生徒は、スマートフォン等を利用して回答。活動内容や感想などの文章データも含め、授業のあったその日中に集計して、担当教師が閲覧できるようにした。

「教科の授業であれば、小テストなどで生徒の理解度を確認しながら授業を進められます。一方、探究活動では、毎時間成果物があるわけではなく、それも教師が不安を覚える要因の一つでした。そこで、生徒の振り返りによって、生徒がその日の授業で活動から何を学び、どのような成長を感じているのかを即時に可視化することで、教師が自身の指導の成果を確認できるようにしました」（福田先生）

生徒の振り返りを見ると、2年生ではすべての項目で、回を追うごとに肯定率が高まっていた。特に、中間発表会や最終発表会の直後に高くなる傾向があり、成果発表という壁を乗り越えることで自己肯定感が高まることがうかがえた。

卒業生に調査を実施し、探究活動の成果を測る

「探求」を担当する教師の意識調査も行っている。これまで、中間発表会後の18年10月、最終発表会後の19年1月の2度実施し、いずれも9割以上の教師が「意義を感じる」、7割の教師が「授業が楽しい」と回答した（図2）。一方、「もっと知的

探究の楽しさを感じられるものにした」と「時間割に配慮してほしい」といった要望もあった。

「多くの教師が、指導が大変だと思いつつも、探究活動に意義を見いだしていました。今後は、『探求』の授業によって生徒が確実に成長していることが分かる評価指標や手法を開発したいと考えています」（西村先生）

その方策の一つとして、卒業後の調査を計画している。卒業生を対象に、探究活動の経験がその後の自身の成長に役立っているのかを聞き、指導改善に生かすとともに、教師の探究活動の指導へのモチベーションアップを図る。

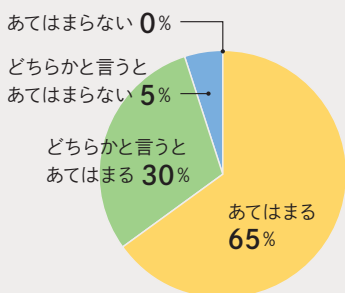
「大阪大学に進学した卒業生が、『周りの学生がレポート作成に手間取っている中、自分は苦もなく仕上げることでできています。高校時代の課題研究の経験が、大きなアドバンテージになっています』と話していました。私も当初、探究的な学びは大学に入ってからでも遅くはないと考えていましたが、高校時代に経験しておくことの大切さを改めて感じました」（坂田先生）

19年度からは1学年の「探求Ⅰ」の内容を改善した。探究活動のテーマをSDGs（*2）を踏まえた内容とし、生徒の目を社会貢献に向けさせたいと考えている。

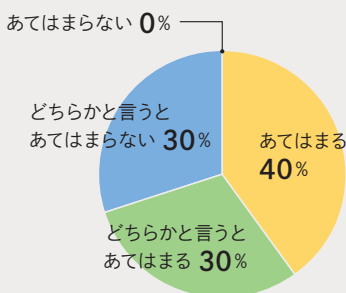
「1学年に生徒の視野を社会に広げることで、2学年の『探求Ⅱ』ではアカデミックな研究に取り組む生徒が増え、教科学習や進路選択にもよい影響が出ることを期待しています」（坂田先生）

図2 「探求Ⅱ」担当教師のアンケート結果

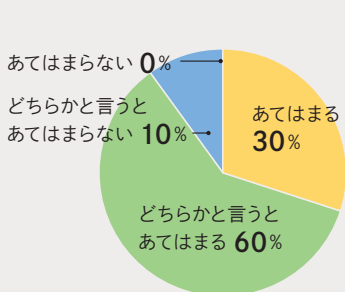
Q. 探究活動を実施することに意義を感じますか



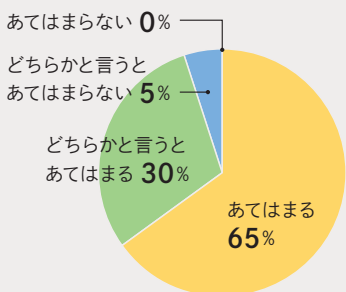
Q. 先生方自身が、授業を担当して楽しかったですか



Q. 生徒の「主体性」（人任せにせず取り組む力）は伸びたと思いますか



Q. 生徒の「発信力」（自分の言葉で説明する力）は伸びたと思いますか



*学校資料を基に編集部で作成。

*2 Sustainable Development Goalsの略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。



探究学習を始めとして、これからの生徒の学びにおける教師のあり方が問われている。それは日本だけではなく、世界的な潮流であり、「The Future of Education and Skills 2030」でも主要なテーマとして議論されている。2019年8月開催の研究会のレポートから、世界の動向をつかむ。

生徒や教師の「エージェンシー」を育む学びのあり方とは？

「地方創生イノベーションスクール2030 第2期 (ISN2.0)」 第4回研究会

1つのテーマを多角的に議論し、新たなアイデアの創造を図る

OECDは、2030年に向けた教育のあり方を考えるプロジェクト「The Future of Education and Skills 2030」を推進している。よりよい社会を実現するために求められる学びの枠組みとして、「The OECD Learning Compass 2030 (以下、ラーニングコンパス)」(図1)を策定。「Transformative Competencies」(よりよい未来の創造に向けた変革を起こす力)や「Taking responsibility」(責任ある行動をとる力)などを、子どもたちへの育成を目指す資質・能力として定義し、それらを育む学習過程として、「Anticipation」(見通し)、「Action」(行動)、「Reflection」(振り返り)から成る「AARサイクル」を示した。そして、そのサイクルを回していく原動力として、「自ら考え、主体的に行動する資質・能力」といった意味の「エージェンシー」を位置づけた。

そのエージェンシーを生徒や教師が高めていく学びのあり方とは何か、「ラーニングコンパス」を具体

的な実践と結びつけて理解しようとして、19年8月、OECD日本イノベーション教育ネットワーク(以下、ISN。*1)の第4回研究会が開かれた(図2)。

開会式では、東北クラスター(*2)の福島市チームを代表して、福島県立福島東高校3年の本多美久さんと同県立福島南高校3年の山谷実加さんが、他者との協働の大切さなど、ISNでの活動を通して得た学びを語った。また、ISN共同代表を務める福島大学の三浦浩喜副学長が、次のように期待を述べた。

「本研究会には、『生徒たちがよりよい社会をつくるために必要な力をつけることのできる教育の実現』という目標を共有する、多様な年齢や職業の人たちが集まっています。そうした環境での議論は、1つのテーマを多くの視点から捉え、目標達成に向けたアイデアを生む源泉になると考えています」

教師のエージェンシーを高める「生徒が主役」という意識

エージェンシーについての理解を深めるための1日目のプログラム

は、3つの柱から構成された。1つめは、ISNの実践校である福島県立ふたば未来学園中学校・高校(以下、ふたば未来学園中学校・高校)の南郷市兵副校長、同校の卒業生である新潟大学工学部1年の遠藤瞭さん、高校時代に和歌山クラスターの一員として地方創生と向き合った東京学芸大学教育学部1年の山本詩央理さんによる、探究学習についてのシンポジウムだ。

ふたば未来学園中学校・高校は、15年度、東日本大震災における福島第一原子力発電所の事故で甚大な被害を受けた双葉郡に開校した。困難を乗り越えて新たな価値を生み出せるよう、全学年で探究学習に力を入れており、2・3年次は、「未来創造探究」と題して生徒が自ら課題を設定するPBL(*3)を行っている。遠藤さんは、その授業で福島第一原子力発電所の廃炉をテーマとしてPBLに取り組み、同原子力発電所や青森県上北郡六ヶ所村の核燃料再処理施設を視察したり、福島市の高校生と廃炉について語り合う座談会を実施したりした。

「PBLに取り組み中で見えてきたのは、地域住民が廃炉に関しての

*1 国際連携で教育研究を行う産学コンソーシアム。
*2 ISNにおける探究学習に取り組む集団。東北・福井・和歌山・広島・高等専門学校などのクラスターがある。
*3 Problem Based Learning、あるいはProject Based Learningの略。

「Informal Working Group Meeting」

（以下、IWG。＊4）に出席した、福井県立若狭高校2年の竹内陽渚さん、筑波大学国際総合学類2年の中畑希さん、OECDのシニア政策アナリストの田熊美保氏の3人による座談会だ（写真1）。

まず、生徒のエージェンシーについて語り合い、中畑さんは「やりたいことに挑戦しようとする意欲」、



写真1 座談会では、福井大学の木村優准教授の司会により、生徒のエージェンシーや、他国の学生・生徒との交流の中で感じた日本の学校の課題などが議論された。左から木村准教授、田熊氏、竹内さん、中畑さん。

竹内さんは「自分の考え」をエージェンシーの中核として位置づけた。

「IWGに参加し、海外では、相手の主張に同意するだけでなく、建設的な修正案などを示すことが求められると感じました。そうした議論を通して、自分と他者との共通点や相違点が浮き彫りになり、自分の考えをより明確にできました」（竹内さん）

田熊氏は、竹内さんのように、自分の変化や成長を客観的に把握することによって、生徒はメタ認知を深め、エージェンシーを高めていくことができると説明した。

「生徒がメタ認知を深めるためには、教師のかかわりが鍵となります。例えば、生徒同士や生徒と教師が遠慮なく話し合えるよう、学校に否定されない雰囲気をつくるといったことです。その実現のために、先生方には、教師のエージェンシーを発揮していただきたいと思います。先生方が疲弊していたら、生徒も新しい工夫をしようという前向きな気持ちになりにくいでしょう。生徒の学びを充実させるためには、教師自身がよりよい生き方を考えることが欠かせません」

図3 チーム学習での各チームのテーマ

- ◎ 「エージェンシー」にかかわるテーマ
 - チームA1：生徒のエージェンシー
 - チームA2：共同エージェンシー
 - チームA3：教師のエージェンシー
- ◎ 「AARサイクル」にかかわるテーマ
 - チームB1：Anticipation（見通し）
 - チームB2：Action（行動）
 - チームB3：Reflection（振り返り）
- ◎ 「Transformative Competencies^{*1}」にかかわるテーマ
 - チームC1：Creating new value^{*2}
 - チームC2：Taking responsibility^{*3}
 - チームC3：Reconciling tensions and dilemmas^{*4}
- ◎ 「Competencies & Well-being 2030」にかかわるテーマ
 - チームD1：Constructs of compound competencies
 - チームD2：Core foundations
 - チームD3：Well-being 2030

※1 よりよい未来の創造に向けた変革を起こす力。
 ※2 新たな価値を創造する力。 ※3 責任ある行動をとる力。
 ※4 対立やジレンマに対処する力。
 ＊研究会資料を基に編集部で作成。

教師のエージェンシーの本質とは何か

柱の3つめは、参加者全員によるチーム学習だ。ラーニングコンパスで重視されている資質・能力や「エージェンシー」、学習方法である「AARサイクル」、「Transformative Competencies」 「Competencies & Well-being 2030」を大テーマとし、それぞれに3つの小テーマを設けて、6人1組のチームに1つずつ振り分けた（図3）。各チームで議論をした後、その内容をチームの代表

者が全体に向けて発表した。

大半のチームで重要な論点となったのはエージェンシーであり、教師のエージェンシーにかかわる内容が目立った。例えば、メンバー6人中5人が高校教師だったチームA3では、教師のエージェンシーの本質は、「生徒がキラキラしていることに喜びを覚える意識にある」と結論づけ、具体的な行動を起こす前に、自分がそうした意識を強く持っているかどうかの検討が欠かせないとした。同じく、メンバーの多くが高校教師だったチームC1では、「Creating

＊4 OECD加盟各国の政府関係者や高校生、大学生、教師が集まり、近未来の社会で求められる資質・能力やその育成方法について議論をする国際会議。

new value」(新たな価値を創造する力)を生徒に育成する方法について検討。メンバー全員の考えが一致したのは、教師が新たな価値の創造を自分事として捉える必要があり、それが教師のエージェンシーと密接にかかわるといふ点だ。また、自分事として捉えられるようになるために、「日々の生活や業務など、自分の身の回りの環境を少し変え、変化によって生じた違いを記録する」といったアイデアも出された。

探究学習を通して、成長を実感する生徒たち

2日目の午前のプログラムでは、「ワークステーション」と「ラウンドテーブル」が行われた。

第2期のISNの実践校や研究校では、ラーニングコンパスに示された資質・能力と密接に関連する① Learning & Teaching for Student Agency ② Future We Want ③ Transformative Competencies & Curriculum ④ Innovative Curriculum Developmentの4分野について、研究プロジェクトが推進されている。ワークステーションでは、参

加者全員がいずれかの研究プロジェクトチームに加わり、チームの研究テーマについて議論した(写真2)。その後のラウンドテーブルでは、各研究プロジェクトチーム混合の十数グループに分かれ、ワークステーションで語り合った内容を共有した。

全グループの議論に共通していたのは、探究学習は、生徒のエージェンシーを高める原動力となるといった認識だ。実際、「ISNや学校での探究学習を通して、自分の考えを論理的に説明したり、自分で設定した目標の達成に向けて粘り強く取り組んだりすることができるようになった」と語る高校生や大学生が目立った。

ただし、探究学習を充実させていくためには課題もあろう。例えば、探究学習は、「それに関心のあ

る生徒だけが取り組む『特別な学習』だという意識を、多くの教師が持っている」と話す高校の教師も少なくなかった。そうした中、教師間の意識の差を解消する方法を検討することも、教師のエージェンシーとして重要になるとされた。

海外との交流を強化し、より多様な学びを実現

ISNでは、第2期における探究学習や研究プロジェクトなどの成果を世界へ発信するため、海外のパートナー校の生徒や教師らを招く「生徒国際イノベーションフォーラム2020」を、20年8月に実施しようとして計画している。今後、ISNに

かかわる全国の高校生や大学生、高校の教師、大学教員から成る実行委員会を設置し、企画を練り上げていく予定だ。

そこで、2日目の午後には、同フォーラムに向けた目線合わせとして、参加者全員が数グループに分かれ、同フォーラムで大切にしたいことを検討した。「フォーラムの目的が、単なる情報発信であれば、インターネット上でもできる。海外の生徒らと直接交流する機会を設ける意義は何なのか」といった問いを立てて話し合い、まとめとして、グループの代表者による意見交換が行われた。そして、「海外からの参加者とのつながりを深め、新たな価値を創造できるよう活動を工夫する」という方向性が打ち出された。

閉会式では、三浦副学長がISNの今後の展望を次のように語った。

「よりよい社会を実現するためには、一人ひとりがエージェンシーを高めるとともに、互いの気づきや学びを共有することが大切です。そうした実りがある活動を充実させられるよう、今後は海外との交流をさらに活性化し、よりよい社会の実現を目指していきたいと考えています」



写真2 ②「Future We Want」をテーマとしたチームでは、高校生と大学生、社会人混合の小グループをつくり、探究学習に取り組む中で感じた課題やその対応策などを出し合った。

文献&ウェブサイト

探究学習の各プロセスで
役立つ書籍やウェブサイトをまとめました。
ぜひご活用ください!

課題設定

探究ナビ期間限定教材
Social issue 資料集 SDGs「子どもの貧困」
<https://www.benesse.co.jp/onigiri-action>



ベネッセの「探究ナビ」では、期間限定教材として、探究サイクルを続けながら社会課題の解決に取り組むTABLE FOR TWOのメンバー2人へのインタビュー記事を掲載した課題設定ワークを作成。

© 2019 年度、ベネッセコーポレーションは、世界の食料問題解決に取り組む特定非営利活動法人 TABLE FOR TWO International が実施する「おにぎりアクション 2019」の活動に協賛いたします。「おにぎりアクション 2019」とは、おにぎりの写真を1枚投稿すると、協賛企業から給食5食分に相当する100円がアフリカ・アジアに寄付される活動のこと。おにぎりアクションアンバサダー校は、北海道・私立海星学院高校、京都府・私立京都学園中学校・高校、兵庫県・私立神戸山手女子中学校・高校。

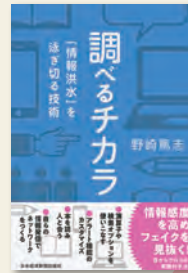
『未来を変える目標 SDGs アイデアブック』
Think the Earth 編著、蟹江憲史監修、紀伊國屋書店 (2018)



SDGsについて楽しく学べるビジュアルブック。インフォグラフィックや写真、マンガなど様々な表現方法でSDGsの情報やメッセージを伝えている。世界や国内の事例も豊富で、アイデアにこだわった紹介がされている。

情報収集

『調べるチカラ 「情報洪水」を泳ぎ切る技術』
野崎篤志著、日本経済新聞出版社 (2018)



ほしい情報をいかに効率的・効果的に見つけ出すか。リサーチのプロが誰にでもできる実践手法を紹介した一冊。

整理・分析

高校生向けの統計サイト
なるほど統計学園高等部
<https://www.stat.go.jp/koukou/>



事例を通して、統計データの作成方法や分析の手法を学ぶことができるウェブサイト。主要な統計データも検索できる。総務省統計局が運営。

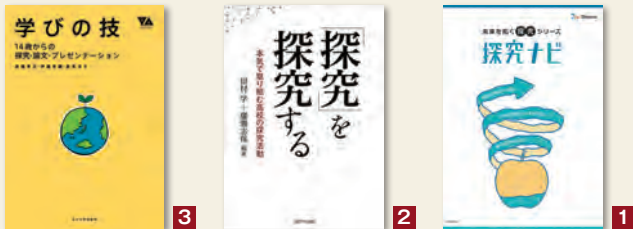
日本最大の図書館検索蔵書サイト カーリル
<https://calil.jp>



全国7,000以上の図書館からリアルタイムで蔵書を検索できるウェブサイト。株式会社カーリルが運営。

付録 探究学習お役立ち

探究学習全般



- 1 『探究ナビ』**
ベネッセの教材の1つで、探究を進めていく上で必要な考え方や学び方のワザとコツが分かる教材。
- 2 『「探究」を探究する 本気で取り組む高校の探究活動』**
(田村学・廣瀬志保編著、学事出版、2017)
高校が取り組む探究学習の基本的な考え方と、全国17の高校の実践例を紹介。
- 3 『学びの技 14歳からの探究・論文・プレゼンテーション』**
(後藤芳文・伊藤史織・登本洋子著、玉川大学出版部、2014)
研究テーマの決め方から情報収集の方法、マインドマップや探究マップなどのツールを活用した論文の書き方、プレゼンテーションの工夫までを紹介。

WWL・SGH × 探究甲子園
開催日：2020年3月21日 場所：関西学院大学
<http://tankyu-koshien.jp>



WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業とSGH（スーパーグローバルハイスクール）事業などの指定校が、探究学習の成果を発表するイベント。見学自由。

『VIEW21』高校版バックナンバー

2016年10月号 特集 P.4～9
問題解決的な「探究学習」がこれからの時代を生きる力を育む
関西大学総合情報学部教授 黒上晴夫

2018年8月号 特集 P.8～13
探究学習における課題設定力を育むために—日々の授業で私たちができること—
大阪大学 全学教育推進機構 准教授 佐藤浩章
宮城県仙台第三高校 滝井隆太
長崎県・私立純心中学校・純心女子高校 植本六秀

2019年6月号 改良! 指導ツール ビフォーアフター P.42～45
探究学習指導・共有シート
* プロフィールは取材時のものです。

まとめ・表現

伝わるデザイン
高校生のための研究発表の手引き
<https://student.tsutawarudesign.com>



発表の構成や組み立て方、見やすい発表資料にするためのデザインなど、高校生が研究発表の準備をするためのノウハウを紹介するウェブサイト。「オフィス伝わる」が運営。

全国高校生マイプロジェクトアワード
開催日：2020年1～3月 場所：全国各地
<https://myprojects.jp/>

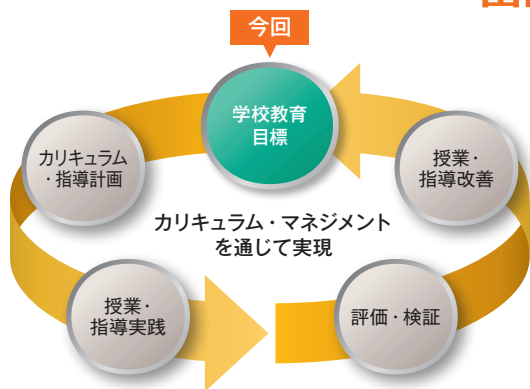


探究学習・マイプロジェクトに取り組んだ全国の高校生を対象に行われる学びの祭典。地域や学校、子どもや大人といった枠を超えて参加者が学び合う。全国大会最終日には文部科学大臣賞を授与。

改 革 事 例

**誰でも参加できる委員会を活用し、
ボトムアップで資質・能力の育成を目指す**

富山県立砺波高校



◎校訓は、「道義為之根」「質実剛健」「自強不息」「進取而敢為」。地域から信頼・期待され、地域の伝統・文化を理解して継承できる人材の育成を図る。公開授業や互見授業を積極的に実施し、指導力の向上にも取り組む。

◎設立 1909 (明治 42) 年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1 学年約 160 人、2・3 学年約 200 人

◎2019 年度入試合格実績 (現浪計) 国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京大、富山大、金沢大、名古屋大などに 136 人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、金沢工業大、同志社大、立命館大などに延べ 319 人が合格。

◎URL <http://www.tonami-h.tym.ed.jp/>



**学校や教育に対する思いを
自由に話し合える場を設定**

創立110年を迎えた富山県立砺波高校は、国公立大学の現役合格者数が例年130人前後に上る地域の進学校であり、地域に根差した教育活動を展開してきた。

同校では、2019年度の1学期末に、「育てたい生徒（人物）像」を設定し、そうした生徒が備えるべき資質・能力を「8つの力」に整理し、「TGP (Tonami Graduation Policy)」と名づけた(図1)。そして、生徒がTGPの到達度を自己評価するためのルーブリックも作成した(図2)。

TGPやルーブリックは、同校が17年度末に設置した「学校活性化委員会」において議論を重ね、形にしていった。ただ、同委員会は、当初からTGP等の設定を目的に設置されたわけではなかったと、林誠一校長は説明する。

「本校は、県内でも少子化が顕著な地域にあります。その影響で定員割れが起こる年もあり、生徒の多様化も進んでいます。一方で、高大接続改革が進行中です。学校を取り巻

く環境が変化する中で、本校の指導が従来のままでよいのか、先生方もいろいろ考えることがあると思います。そこで、私が赴任した17年度に、率直に自分の考えや思いを言い合える場を設けようと始めたのが、本委員会でした」

**自校の強み・弱みを整理し、
育成を目指す生徒像を議論**

同委員会は、教務部が運営を担った。委員は固定とせず、毎回、希望者が入れ替わり立ち替わり自由に参加できることにした。

17年度末に初めて開かれた同委員会には、同校の教師46人のうち約半数が参加。4人ずつのグループに分かれて話し合ったところ、話題は授業改善や行事の見直し、教職員間の情報交換のあり方など、多岐にわたリ、活発に意見が飛び交った。そこで、18年度以降も同委員会が開催されることになった。

18年度、新たに設置され、同委員会の運営担当部署となった企画研修部の部長の中町保先生は、その後の経緯を次のように語る。

「17年度末の本委員会での話し合

* 「学校教育デザイン」とは、本誌が2017年度6～12月号の特集で提唱した、「学校教育目標からカリキュラム・指導計画の策定、授業・指導実践、その評価・検証、授業・指導改善までの一連のサイクルが、カリキュラム・マネジメントを通じて実現される学校改革の営み」のこと。



浅井正浩
地理歴史・公民科主任
あさい・まことひろ
教職歴8年。同校に赴任して3年目。2学年担任。



大谷 学
保健体育科主任
おたに・まなぶ
教職歴13年。同校に赴任して7年目。2学年担任。



中町 保
企画研修部部長
なかまち・たもつ
教職歴33年。同校に赴任して7年目。



山田 聡
進路指導主事
やまだ・さとし
教職歴35年。同校に赴任して7年目。



清水 卓
教頭
しみず・たかし
教職歴34年。同校に赴任して2年目。



林 誠一
校長
はやし・せいいち
教職歴37年。同校に赴任して3年目。

いを通して出された様々な意見を整理する意味で、まずは自校の現状を把握するSWOT分析（*1）を、18年度の本委員会の初回（7月）で行うこととなり、地域や生徒、教師などの強みと弱みを出し合いました。生徒の強みは、真面目で何事に

も一生懸命取り組むこと、弱みは言われた事柄以外は積極的にやろうとしないことといった声が上がりました。第2回以降の本委員会では、そうした声を踏まえて、本校としてどのような生徒を育てたいのか、そのためにはどのような資質・能力を身につけさせればよいのかを話し合いました。

そうした中で出てきたのが、育成を目指す資質・能力を、「○○力」などの短い言葉に整理した方がよいといった意見だった。それは、素直で真面目な生徒だからこそ、授業や行事、部活動を通じて身につけてほしい資質・能力を分かりやすい言葉で示せば、生徒は教師からのメッセージを真摯に受け止め、それらの資質・能力を身につけようと自ら動くのではないかとという考えに基づいたものだった。

そして、その整理の土台としたのが、進路指導部が18年度の初めに、進路指導の面から生徒に育成を目指す資質・能力として試作的に設定し、職員会議で提案していた「自己力」や「継続力」などの6つの資質・能力だった。進路指導主事の山田聡先生は、その経緯を次のように語る。

図2 「TGP自己評価」シート

TGP自己評価(7月) 7月19日 〆切

本校では、生徒の皆さんに、卒業までの3年間に、この8つの力を身につけてもらいたいと考えています。(以後TGP(Tonami Graduation Policy)と呼ぶ)そのために、学校では学校行事をはじめ、多くの教育活動に取り組んでいます。

・あなたは今、どの位置にいますか。率直に書いてください。

TGP	目標達成度評価基準表			評価	
	S	A	B		C
自律・規律	Aに近え、得意にも強みがある。	規則、手順、習慣、目標設定について意識し、自分実践している。	Aのよう、できていないものがある。	Aのほとんどできていない。	
協働力	Aに近え、得意な多様な価値観を認め、多様な視点に立つことができる。	自分や他者を理解し、取り込むことができる。	状況により、Aのほとんどの強みがある。	他者を理解せず、自分の考えに固執する。時に、他者に合わせる。自分は強者である。	
自己力	Aに近え、自分の強みを伸ばし、それを基盤として取り組んでいる。	自分の場所、役割を理解し、地道に継続的に取り組むことができる。	自分の場所より強みが発揮され、周囲に貢献している。	自分の場所が狭いだけで、得意にも強みが持てない。	
行動力	Aに近え、周囲を巻き込んで取り組むことができる。	自分ひとりで実行し、実行することができる。	状況により、Aのほとんどの強みがある。	実行したことは少ない。	
継続力	Aに近え、つまづきにくい強い意志を持って取り組んでいる。	計画を立て目標に向かって実行することが、目標である。	計画を立て目標に向かって実行しようとしているが、持続しない。	その日の気分で行事に取り組むことが多い。	
思考力	Aに近え、自分の強みを伸ばし、それを基盤として取り組んでいる。	疑問を感じた時、「なぜか」を、疑問に基づいて積極的に考えることができる。	疑問を感じた時、「なぜか」を、疑問と考える。	疑問を感じても、「なぜか」を考えたことはほとんどない。	
発信力	Aに近え、より自分から発信し、他人を巻き込んで取り組むことができる。	伝えたいこと、伝えたい方法を、自分自身で発信し、周囲に伝えることができる。	状況により、Aのほとんどの強みがある。	伝えたいこと、伝えたい方法を、周囲に伝えることが少ない。	
創造力	Aの強み、得意な新しい方法、新しい考え、新しい行動に出ることができる。	既存の方法(方法、手順)にとらわれず、より良い方法(方法、手順)を考案し、実践しようとする。	既存の方法(方法、手順)の中で考え、新しい方法(方法、手順)を考案し、実践しようとする。	既存の方法(方法、手順)を固執し、新しい方法(方法、手順)を考案しない。	
S 5点 A 4点 B 2点 C 1点				合計	
年 組 番					40

*学校資料をそのまま掲載。

図1 育てたい生徒(人物)像とTGP(8つの力)

育てたい生徒(人物)像

- ・地域を担うことのできる生徒(人)
- ・時代のニーズに応えることができる生徒(人)
- ・自ら目標を定め、それに向かって地道に、かつ、しなやかに生きる自立した生徒(人)

TGP(8つの力)

TGP	概要	キーワード
1 自律・規律	社会規範を正しく理解し、自ら守ることができる。	公平・公正・規範意識
2 協働力	自分や他者を理解し、多様性を認め、他者と協力し、取り組むことができる。	協調・協働・思いやり・謙虚・多様性の尊重
3 自己力	達成感の積み重ねから自信を持ち、自己評価・分析ができる。	自己肯定感・メタ認知
4 行動力	指示待ちでなく、自分の考えで行動することができる。	行動力・積極性
5 継続力	困難にも粘り強く柔軟に対処し、積極的行動を継続できる。	粘り強さ・柔軟性・計画性
6 思考力	なぜなのか、本当にそうなのかを考え、事実を客観的に分析できる。	課題発見力・論理的思考力
7 発信力	自分の考えを言語化し、分かりやすく他者に伝えることができる。	発信力・表現力
8 創造力	課題解決に向けての創造ができる。新たな価値を生み出す。	創造性・課題解決力

*学校資料を基に編集部で作成。

*1 内部環境を強み(Strengths)、弱み(Weaknesses)、外部環境を機会(Opportunities)、脅威(Threats)のカテゴリーに分類し、経営方法に生かす分析方法の1つ。

「6つの資質・能力は、教師からの疑問に答える形で行事の目的を整理しつつ、他校の取り組みや、本校の100周年記念冊子に記されていた『砺波高校で育てたい力』を参考にしながら、進路指導部として設定したものでした。ちょうどその時に企画研修部が立ち上がり、学校全体で育成を図る生徒の資質・能力を設定することになりました。そこで、進路指導部の案を引き継ぎ、企画研修部に検討をお任せしました」

教育活動の土台となる学校 教育目標は、学校全体で議論

同校で育成を目指す資質・能力は、学校活性化委員会で教師が学校の現状や目指す姿について率直に話し合い、現場の声を汲み上げながら、言わばボトムアップでつくり上げられたものだ。そうしたことができたのは、教師同士が何でも話し合える学校文化が同校にあったからだ。18年度に同校に赴任した清水卓^{あか}教頭は、次のように振り返る。

「初めて本委員会に出席した時、教師たちが率直に意見を述べ、またそれをしっかりと受け止めて、教育の

あり方について熱く議論を交わしている様子に大変驚きました」

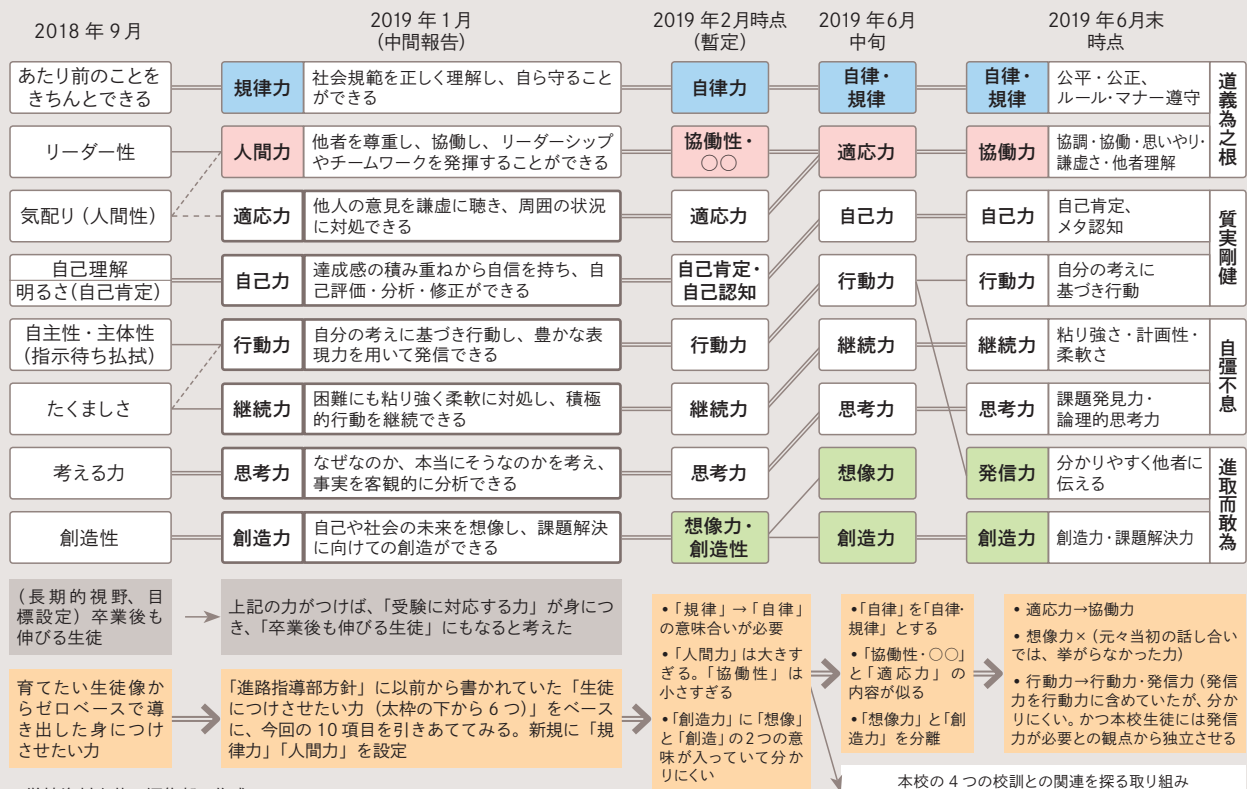
学校活性化委員会は、現場の教師にとっても大切な場になっていると、2学年担任で保健体育科主任の大谷学先生は語る。

「本校は、これまで学年や分掌の独立性が強く、教育活動の設計や計画は学年や分掌に任ざられていました。しかし、個々の教育活動を通じて、生徒にどのような資質・能力を育みたいのか、そのために何をすべきなのかといった本校の根幹にかかわる部分は、学年や分掌を超えて学校全体として考えるべきです。そういった意味で、本委員会は、誰でも参加でき、みんなで学校のあり方について議論できる大切な場になっています」

同委員会が効果的に機能している要因には、17年度から行われている校内研修の存在も大きい。それは、大学教員等を招き、高大接続改革や学習指導要領の改訂、主体的・対話的で深い学びなど、教育改革の方向性を学ぶ研修会だ。年5回が年間行事に組み込んであり、原則全員参加としている。

「校内研修を通じて、教師間で日

図3 砺波高校の「育てたい力」を検討した推移





**私自身も
発信力や協働力を
高めていきたい**

大谷 学先生

本校が設定したTGPは、生徒だけでなく、教師も身につける必要がある資質・能力だと思います。特に、「発信力」と「協働力」が重要だと考えています。

私は以前から、社会の変化に応じて学校も変わっていく必要があるという思いを抱いていました。けれども、ただ心の中でそう思っているだけでは駄目で、周りに発信していくことが重要です。さらには、周りの人と協働できる力もないと、現状を変えることはできません。

今回、学校活性化委員会を通じて、学校をどのように変えていくのかをみんなで議論し、実際に変えるための第一歩を踏み出すことができたのは、多くの先生方が「発信力」と「協働力」を発揮した結果だと思います。私も生徒とともに、8つの力を高めていきたいと思っています。

TGPの「8つの力」の検討やルーブリックの作成は、企画研修部

**生徒が意識しやすいよう
行事や単元ごとに力を明示**

本の学校教育がどこに進もうとしているのかについての理解が深まり、教師それぞれが、自校の教育についてより深く考えることにつながったと思います。そうした土台があったため、本委員会で本校の今後のあり方を議論した際に、各自が教育動向を踏まえた上での大局的な観点から自分の意見を述べることができ、非常に建設的な議論となりました（清水教頭）

が案を作成し、それを同委員会で吟味し、練り上げていく方法で進められた（図3）。

「委員会では、「人間力という言葉は概念が大きすぎる。本校に合った言葉にした方がよいのではないか」「ルーブリックの文言は、生徒が読んでも理解できる分かりやすい言葉にしよう」など、活発に意見が飛び交いました。企画研修部が提出した案には、何度も修正が加えられることになりました」（中町先生）

そうして完成したTGPとルーブリックは、19年度の1学期末の終業式で初めて生徒に示された。生徒は、その直後に行われたホームルームで、早速ルーブリックを基に、現

在の自分の達成度をスムーズに自己評価したという。

次いで、同校が着手しようとしているのが、行事ごとに、TGPの中でも特にどの資質・能力を育むことを目指しているのかを示した一覧表を作成することだ。それにより、生徒は、例えば「体育大会では、協働力と行動力を高めることを目指して頑張ればいいんだな」など、目標を持って活動に取り組むことができようになる。なお、あまり多くの資質・能力を1つの行事の中で育成する形にならないよう、行事ごとに重点を置くTGPを決めていくという。さらには、各教科・科目の単元ごとに、それぞれ身につけさせたい資質・能力を明示した教育課程表を作成することも検討している。

ルーブリックによる生徒の自己評価は、学期末や主要な行事の際に行う予定だ。2学年担任で地理歴史・公民科主任の浅井正浩先生は、その構想を次のように語る。

「4段階での自己評価を書き込むだけではなく、前回と比較して具体

的にどんな部分が伸びて、現時点での課題は何かも書き込める欄を設けようと考えています。それをポートフォリオとして蓄積していけば、生徒はそれまでの自分の歩みを振り返ることで、現在の自分の到達点が確認でき、新たな目標を設定して踏み出すことが容易になります。また、教師も面談などの場面で、ポートフォリオを参考にしながら、生徒に対して効果的なアドバイスをしていくことが可能になります」

同校では、そうした学校の方向性にかかわる重要事項を、希望すれば誰でも参加できる学校活性化委員会で議論し、形としてきた。より多くの教師が意見を出し合って決めたことは、学校全体での共有もしやすくなる。ボトムアップの意思決定方法が効果的に機能していることが、同校の最大の強みだろう。

「学校活性化委員会の取り組みは、今は道半ばですが、新しい時代に向けた授業改善につながることを目標として、教師一丸となって推進していきます」（林校長）

導かれた道標

自分の考えや思いを自由に言い合える場があることで、皆が当事者意識を持てる教育目標を創り出す

8:55 前回の復習と本時の解説



前時の復習として、相蘇先生が、画像のデジタル表現（画素・解像度など）を解説した。画像を画素によって区画化する標本化、画素を色の組み合わせで示す量子化、その情報を2進法で表現する符号化という、画像のデジタル化のプロセスを振り返った。それを踏まえ、本時の導入として光の三原色について解説した。

授業 ハイライト

●1年生の「情報」で、単元「情報のデジタル表現」の全7時間のうちの5時間目。ディスプレイのすべての色は赤・緑・青の3色で表現されていることを理解するため、タブレット端末のカメラ機能を用いた実験を行った。（P.33に単元の指導計画を掲載）

主体的・対話的で
深い学びへ

実践 アクティブ・ラーニング

情報

ICT活用とグループワーク、 他教科との融合で、 情報化社会を生き抜く力を育む

相蘇先生のアクティブ・ラーニング

次期学習指導要領を見据え、 ICT教育を推進

AI（人工知能）が進化し、社会が変革期にある中、次期学習指導要領では「情報活用能力」の育成が重視され、「大学入学共通テスト」では教科「情報」の導入が検討されている。北海道・私立札幌龍谷学園高校では、未来を生きる生徒たちに「情報」の学習がさらに必要と考え、3



北海道・私立札幌龍谷学園高校 相蘇孝哉 あいそ・たかや

教職歴9年。同校に赴任して2年目。

情報教育部。

ICT環境を生かし、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業を推進している。

北海道・私立札幌龍谷学園高校

◎札幌龍谷学園札幌女子高校として開校し、1995年に現校名に改称。「生かされて生きる」を教育理念、「和顔愛語」を校訓とし、心を育てる教育を重視する。習熟度に応じて「特進」「プログレス進学」「未来創造」など、5コースを設置。オーストラリア研修や留学生の受け入れなど、国際教育も積極的に推進している。

◎設立 1963（昭和38）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約220人

◎2019年度入試合格実績（現浪計）

国公立大は、小樽商科大、北海道教育大、札幌医科大学などに23人が合格。私立大は、北海学園大、北星学園大、中央大、龍谷大などに延べ88人が合格。

◎URL <https://sapporo-ryukoku.ac.jp/>

9:18 タブレット端末を使った実験



2人1組で、ディスプレイがどのように色を表現しているのかを確認する実験を行った。白一色にしたタブレット端末の画面を、レンズに水滴をつけたもう一方のタブレット端末で撮影。水滴によって端末が顕微鏡の役目を果たすようになった。拡大して撮影した白一色の画面を、画像データとして保存した。

9:08 個人で考え、グループで共有



「ディスプレイはどのように色を表現しているか」を生徒個々に約3分間考えさせ、考察結果をタブレット端末に入力し、先生のタブレット端末に送信。次に、4人グループになり、メンバーに自分の考えを説明した後、「赤を1とすると……」「色に光をあてるのでは？」などと、約5分間話し合った。先生に指名された2人が、自身の考えとグループで出た意見を発表した。

「教科書を読むだけでは、学習内容は単なる知識にとどまりがちですが、『実験』で実際に

仕組みを確認した。生徒同士で協働して「光の三原色」による発色の仕組みを確認した。

他教科のノウハウを取り入れて 問いや活動内容の質を高める

思考の活性化・深化への配慮

相蘇先生の授業の特徴は、他教科・科目の指導ノウハウを積極的に取り入れていることだ。

今回の「画像のデジタル表現」では、教科書に沿った原理の説明にとどまらず、理科の実験をイメージして、生徒自身が道具を使い、生徒同士で協働して「光の三原色」による発色の仕組みを確認した。

「前任校の時から、AIに関する知識や手法について学校を超えた勉強会に参加して学び、指導案を作成していました。本校では、ネットワーク環境が整い、生徒はタブレット端末を1台ずつ持っています。その環境を生かしてグループワークや実験などを取り入れ、講義型の授業スタイルからの脱却を図っています」

個人の考えを持たせることで、 話し合いを活性化させる

場づくりへの配慮

「他教科とのつながりが多い『情報』の教科特性を生かして、教科書の枠を超えた活動や思考を深める問いになるよう工夫しています」

自分の手を動かし、自分の目で確認することで、理解が深まり、定着度も高まるでしょう。今日の授業でも、実験中に生徒がうなずいたり、リフレクションに集中して取り組んでいたりと、意欲的に授業に参加している様子が見られました」

グループでの話し合いや発表の方法は、国語の授業を参考にした。話し合いでは、生徒が自分の考えを述べ合うだけではなく、メンバーの考えをしっかりと聞き取ることに意識を向けさせる。そして、発表の際は、自分の考えだけでなく、グループでどのような考えが出たのかも要点をまとめてプレゼンテーションさせ、コミュニケーション力や傾聴力、表現力を高めている。

また、地理歴史・公民科の教師からは、知的財産権の成り立ちや意義を聞き、生徒に説明した。「情報」の教科書に書かれている法律の意義などに加えて、知的財産権保護は制作者の権利を守るだけではなく、文化の発展が根底にあることを踏まえさせ、「なぜ著作権が必要なのか」といった問いかけに深みを持たせようと努めた。

相蘇先生がAIを授業に取り入れた当初は、

9:34 個人の振り返りと解説



生徒は個々に実験の振り返りを行った。タブレット端末に実験結果と授業で学んだことを入力し、相蘇先生のタブレット端末に送信した。相蘇先生は教室を歩いて、「もっと具体的に書こう」「色の組み合わせはどうなっていた？」などと声をかけた。最後に、改めて本時の学習内容を解説し、今回は符号化について学ぶことを伝えた。

9:29 実験結果の共有、追加実験



白一色の画面を撮影した画像を確認すると、赤・緑・青の3色の画素が規則正しく並んでいるのが分かり、生徒は「すごい」「うまく撮れた」と驚きの声を上げた。続いて、黄で同じ実験を行った。相蘇先生は、生徒が転送した画像を黒板に映して、白では赤・緑・青、黄では赤・緑の繰り返しであることを説明し、赤・緑・青の3色ですべての色を表現していることを確認させた。

グループワークがうまくいかないこともあった。情報量が豊富な生徒や、話し上手な生徒が話し合いをリードすることが多く、声の小さい生徒が傍観する場面も見られた。

「その原因を考えるうちに、議論に必要な知識や自身の意見を整理させず、いきなり話し合いをさせていたことに気づきました。課題を与えたらすぐに話し合わせるのではなく、まず1人で考える時間を取り、自分の考えをまとめさせた上で、話し合いをさせる方法に改めました」

今回の授業でも、相蘇先生は、解像度や光の三原色（加法混色）などの説明をしてから、ディスプレイの発色方法について生徒個々に考えさせ、それからグループで話し合わせた。

今後は、グループ内で各自の意見を共有するだけではなく、答えが1つではない問いについても話し合わせたいと考えている。SNSでのマナーやフェイク情報への対処の仕方、情報を発信する側と受け取る側の意識や気持ちの違いなどについて考えさせるつもりだ。

「情報リテラシーを身につけさせながら、思考力や表現力を高め、情報化社会・AI社会を生き抜く力を育みたいと考えています」

成果と課題

毎時間のリフレクションにより、思考力や表現力が向上

AI導入の最大の成果は、生徒の表現力の向

上である。毎時間、リフレクションカードを書かせて提出させたところ、年度当初は数行しか書けなかった生徒が、1年後には自分の意見や振り返りをぎっしりと記入するようになった。学習内容の理解を深め、思考力と表現する力が高まっていると言える。年度末には、年度当初から書いてきたリフレクションの内容を読み比べさせている。その機会によって自身の成長に気づき、自信を深める生徒も多い。

そうした生徒の成長を見て、相蘇先生自身、授業づくりにやりがいを感じている。

「かつての自分の授業スタイルは、一方的に知識を与え、それを定期考査で確認することの繰り返しで、生徒が成長しているのか、実感が持てていませんでした。今は、生徒の表情や課題に取り組む姿勢、リフレクションカードの記述内容などを通して、生徒の理解度や意欲・関心がリアルタイムに把握できるようになりました。次はどんなことをしよう、生徒をどう動かそうなどと考えることが楽しくなりました」

今後は、生徒がより主体性を発揮し、生徒主導で授業を進めていける環境づくりをしていきたいと語る。

「生徒自身が自ら課題を設定し、調べたり考えたりする、探究的な要素を授業に取り入れたと考えています。教師は、それを見守り、必要な時だけ助言する。生徒自身が授業をつくることで、考えることの楽しさや学ぶ喜びを感じられるようにすることが目標です」

単元の指導計画

【教科・科目】情報・社会と情報 【分野・単元】情報のデジタル表現 【テーマ・作品】画像のデジタル表現 【設定時数】全7時間の中の5時間目 【単元目標】デジタル表現の種類とその利点・問題点について理解させる。デジタル化の手法を理解させる。

時数	学習内容	身につけさせたい資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	10進法、2進法、16進法について学ぶ	<ul style="list-style-type: none"> 正しい知識を身につけて、理解できる。 【知識】	①コンピューターは2進法の世界であることを学ぶ。 ②5人1組となり、1人が2進数の1桁を担当し、与えられた10進数がどのように表現されるか、体で表現させる。	【対話的な学び】 グループで協力して行う活動を取り入れる。	課題写真
2	2進法から10進法、10進法から2進法への変換	<ul style="list-style-type: none"> 既習事項を用いて意欲的に取り組む。 【思考力、表現力、主体性】	それぞれの基数変換の方法を具体的に解説。解き方について確かめ、問題を解かせる。	【主体的な学び】 簡単な基数変換の問題を質問し、答えさせる。	
3	情報量の単位と文字のデジタル表現	<ul style="list-style-type: none"> 正しい知識を身につけて、理解できる。 グループ内で積極的に発言できる。 【知識、表現力、主体性】	①2人1組になり、文字コードを使って、相手に文字データを送る。 ②問題点などを考えさせ、発表させる。	【対話的な学び】 ペアで協力して行う活動を取り入れる。	
4	A/D変換、画像のデジタル表現	<ul style="list-style-type: none"> 正しい知識を身につけて、理解できる。 【知識】	画像のデジタル化を紙上で段階を追いつながら行う。	【深い学び】 アナログ-デジタル変換回路の問題点について、広い視野を持って考えさせる。	ワークシート
5	画像のデジタル表現	<ul style="list-style-type: none"> 正しい知識を身につけて、理解できる。 グループ内で積極的に発言できる。 【知識、思考力、表現力、主体性、協働性】	2人1組で、タブレット端末の画面を利用し、光の三原色ですべての色を表現していることを確認する実験を行う。	【主体的な学び】 実験を通じて、三原色の理解を深めさせる。 【対話的な学び】 グループで協力して行う活動を取り入れる。	結果、感想カード
6	動画のデジタル表現、音のデジタル表現	<ul style="list-style-type: none"> 正しい知識を身につけて、理解できる。 【知識】	教科書のパラパラ漫画を使用し、静止画の集まりが動画になることを学ぶ。	【主体的な学び】 前時までの多くの要素が関連するため、生徒に質問しながら既習事項を確認させる。	
7	単元のリフレクション	<ul style="list-style-type: none"> 既習事項を用いて意欲的に取り組む。 【思考力、表現力、主体性】	①単元で学んだことを振り返り、学習内容をまとめさせる。 ②アプリケーションを利用して、学習内容のクイズを作り、生徒同士で問題を出し合わせる。	【主体的な学び】 単元で学んだこと、考えが変わったことなどを記入させる。 【深い学び】 単元の学習内容が、今後の生活でどのように生かせるかを具体的に考えさせる。	リフレクションカード

*相蘇先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。

生徒の声



蛭名芽生さん 相蘇先生の授業は、タブレット端末を使い、実際に作業をしながら学べるので、知識が身につけやすいと感じています。

グループでの話し合いは、自分と異なる意見に触れるよい機会です。メンバー間で意見が異なる場合もありますが、そういった時は、なぜその結論になるのか、話をさかのぼって理由を探り、間違いがあれば指摘して、よりよい答えに近づけるよう、みんなで努力しています。話し合いを通して、みんながそろって成長できている実感が持てるのも、相蘇先生の授業の魅力だと思います。

これからの活動の時間を大切にして、思考力や表現力、コミュニケーション能力を高めていきたいと思っています。



熊谷一希さん タブレット端末を使った実験やグループワークなど、中学校時代にはあまりなかった授業にやりがいを感じています。タブレット端末を使うと、メンバーや先生と情報のやり取りがすぐにできるので、自分の意見と友人の意見を比べたり、別の考えを持てたりして、学びが深まるように感じます。

相蘇先生の授業は、話を聞くだけの授業と違って、グループワークや実験が多いので、授業で学んだことが印象に残りやすいと思います。テスト勉強をしている時にも、「あんなことをやったな」と思い出しながら復習できるので、知識が定着するようになりました。

情報の授業で学ぶことは、社会に出てからも役立つと思うので、これからも楽しみながら、しっかりと学んでいきたいと思っています。

10:43 「マイコン」がスタート

授業
ハイライト

主体的・対話的で
深い学びへ

実践
アクティブ・ラーニング

現代文



「マイコン」は、「My concerns ～私の関心事～」の略で、現代文の授業冒頭に、毎時間行われる生徒によるミニスピーチだ。くじ引きで選ばれた発表者が、自分の関心事について約3分間のスピーチを行う。発表者と同じグループの生徒3人はコメンテーターとして教壇の横に座り、発表者の話に対して、自分がまとめた考えを発表した。

●1年生「国語総合」現代文の1学期全18時間のうちの17・18時間目。加藤先生が『客観的と抽象的』（森博嗣著）を音読。生徒はそれを聴き、メモを取った上で、筆者の主張を「論理マップ」にまとめる取り組みをグループで行った。（P.37に単元の指導計画を掲載）

説明的文章の論理展開図の作成を通じた生徒同士の学び合いで論理的思考力を育む

加藤先生のアクティブ・ラーニング

学び合いを基に
論理的思考力を育成する授業を展開

加藤克巳先生が、生徒同士の学び合いを重視する授業を行うようになったのは、2006年度に始まった学校改革がきっかけだった。学校の教育理念「心豊かな、創造型・発信型のリーダーを育成する」の達成に向けて、担当教科の国語科では、指導指針として「ゆるぎない思考力の



埼玉県・私立開智高校（開智学園 高等部）

加藤克巳 かとう・かつみ

教職歴30年。同校に赴任して31年目。

教頭。国語（現代文）担当。

論理的思考力を育む教材を用いた独自メソッドを開発し、同校の教育改革を担う。教頭として学校経営にかかわる傍ら、現場での指導も続けている。

埼玉県・私立開智高校 （開智学園 高等部）

◎埼玉第一高校として開校。新しい文化と文明の創造に貢献できる各分野のリーダーを育てるため、「学び合う」授業の実践を通して論理的思考力を、探究学習を通して創造力を育む教育活動を行う。

◎設立 1983（昭和58）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約260人

◎2019年度入試合格実績（現役のみ）

国公立大は、北海道大、東北大、千葉大、東京外国語大、東京大、一橋大などに49人が合格。私立大は、慶應義塾大、中央大、東京理科大、明治大、早稲田大などに延べ541人が合格。

◎URL <http://www.kaichigakuen.ed.jp/koutoubu/>

11:30 意見交換、内容整理



個人で作成したワークシートを基に、4人グループで意見交換を行った。進行役は加藤先生が指名。話し合い中、加藤先生は各グループを見て回った。そして意見交換が終わった頃を見計らい、「話が深まってくると枝葉の部分に話が集中しがちです。文章のテーマと筆者の主張について、グループ内でコンセンサスが取れているか確認しましょう」と伝えた。

11:03 音読を聴きながら、メモを取る



加藤先生が「森さんという方の書いた文章を読みます」とだけ伝え、ゆったりとしたスピードで文章を音読（約10分間）。生徒は事前に配られたA3判の用紙に、重要だと思う言葉をメモしていった。その後、ワークシートが配られ、自分のメモを基に今回の文章のテーマ、筆者の思考過程、筆者の主張を約7分間で記入した。

育成」を掲げ、授業改革を行った。

「『ゆるぎない思考力』とは、『聴く力』『考える力』『表現する力』『創造する力』の4つから成ると考えています。それらを鍛えるために、授業の中心に生徒それぞれが考えを持ちよってグループで話し合う学び合いを据え、2時間連続で授業を行っています。学び合いでは、どの生徒にも、自分の頭で考え、自分の意見を発表することが求められるため、『ゆるぎない思考力』を構成する4つの力が鍛えられ、論理的思考力が深まっていきます」

1年次は、論理的思考力の土台となる日本語運用能力の育成を中心とした授業を行う。

「現在の入試でも、批判的な視点から自分の考えを論理的に表現する力が重要です。その視点を育成するために、1学期は、『聴く力』『考える力』を磨きながら、文章の論理構造を捉える力をつけます。2学期は、生徒同士でディベートを行い、『表現する力』『創造する力』を高め、批判的思考力を鍛えます。そして3学期には、より深い読解ができる力を育成します」

思考の活性化・深化への配慮

生徒同士による対話を通じて、文章の論理展開を整理する

加藤先生の授業は、毎授業の冒頭に行う「マイアイコン」と、本時の課題に分かれている。「マイコン」は、生徒1人が自分の関心事についてス

ピーチを行い、発表者と同じグループの3人の生徒が、それを聴いて自分の考えを述べる時間だ。聴く、メモを取る、考える、話すという活動を通して、日本語運用能力を鍛えていく。加藤先生は、考えを論理的にまとめる手法として「PREP法」(*)を取り入れていく。聴き手の生徒は、初めは語り手の要旨をつかんだり、考えをすぐにまとめたりすることがなかなかできなかったが、PREP法の活用により、次第にスムーズに話せるようになっていくという。

その後、本時の課題である「聴解」に取り組む。「聴解」とは、文章の音読を聴き、その内容を理解することだ。加藤先生は、「聴く力」を重視した授業を行うねらいを次のように話す。

「文章を読む時も、人とコミュニケーションをとる時も、相手の主張をつかむことが大切です。その主張が把握できないと、それへの賛否や、自分の考えを表現することもできません。聴解では、重要なところはメモを取り、語り手の話を集中して聴くことにより、筆者の主張を理解し、脳の瞬発力を鍛えていきます」

今回取材したのは、1学期最後の授業で、「聴解」の2回目だった。生徒は、先生の音読を聴きながらメモを取り続け、各自で要旨をまとめる。そのメモを基にグループで話し合い、文章のテーマ、文章の論理展開、筆者の主張を図解した「論理マップ」を作成する。その「型」については既に指導しているため、加藤先生はこの指導は行わず、生徒に委ねている。

* ビジネスのプレゼンテーションなどで取り入れられている手法で、Point（結論）、Reason（理由）、Example（具体例）、Point（結論）の順で文章を構成する。

12:00 各グループの発表



完成した「論理マップ」を黒板に貼り、グループごとに内容を発表。加藤先生は、「発表はPREP法(P.35*)で行ってください」と指示し、発表順も加藤先生が決めた。各グループ代表者1人が約1分間で発表。生徒には2枚目のワークシートが配られ、各グループの発表を聴きながら自分の考えを記入した。最後に「論理マップ」とワークシートを提出した。

11:40 「論理マップ」の作成



グループごとに、今回の文章のテーマ、論理展開、筆者の主張を図式化した「論理マップ」を模造紙にまとめていった。「論理マップ」の形式については、加藤先生からの指示はなく、ツリー型、二項対立型、マトリックス型など、生徒たちは様々な形式で作成。キーワードの内容に合わせて、付箋の色を変えているグループもあった。

「今回の文章には、対比される言葉が数多く出てきますが、ポイントの1つが、『理性的』という言葉がキーワードとして取り上げられたかどうかです。『感情的』という言葉の対比となる『理性的』という言葉は、読み上げた文章中には1度しか出てきません。重要な言葉を聴き逃さずに『論理マップ』上に盛り込めたかどうか、評価ポイントの1つになります」

ただ、加藤先生は「論理マップ」の講評はしない。生徒に相互評価をさせるだけだ。そのねらいを加藤先生は次のように話す。

「教師から指導されるのではなく、生徒自身が学び合いや他グループの発表から、よい『論理マップ』を作るにはどうすべきかの気づきを獲得することが大切なのです」

実際、前回の聴解では、「論理マップ」をまとめるのに1時間かかったが、今回はその半分の時間で終わった。

「前回も同じ二項対立の構成の文章でした。前回の反省を踏まえて、生徒には『こう聴こう』『こうまとめよう』といった意識があったため、短時間で深いまとめができたのだと思います」

場づくりへの配慮

指導は控えめとし、生徒が考えを創造する力を鍛える

グループは1学期中は固定し、同じメンバーで学び合いをさせた。話し合いの進行役である

モデレーターは着席順で指定され、すぐに話し合いがスタートする。意見交換がうまく進まないグループには、加藤先生も参加して、生徒の意見を引き出すことがあるという。

「1つの正解に到達するための授業ではなく、仲間と答えを創造していく授業を目指しています。そのため、『しなさい』という発言は控え、生徒の声を引き出すことに徹しています」

成果と課題

授業の質を保証するため、授業スタンダードの設定を検討

授業改革の成果は、行事などに積極的に取り組む生徒が増えるなど、主体性の伸びに表れてきた。また、改革初年次から進学実績の伸長にもつながったという。

「文化祭などでは、自分たちが考えた企画書を教師にプレゼンテーションし、主体的に運営・実施できるようになりました。本校の教育理念に近い生徒を育成できていると感じます」

今後の課題は、生徒に身につけさせる力を保証するため、単元ごとに指導内容・方法を明確にした授業スタンダードを設定することだ。

「生徒主体の授業をしたいと考え、生徒の反応を踏まえて指導内容や方法を毎年度変えてきました。今後は、その中でも核となる部分是不変とし、より細かい年間指導計画を立てていきたいと考えています」

単元の指導計画

【教科・科目】国語・国語総合 【分野・単元】現代文 【テーマ・作品】説明的文章の聴解を通して文章の論理構造をつかむ
 【設定時数】1学期全18時間の中の17・18時間目（1回の授業は2時間連続） 【単元目標】論理的思考力・判断力・表現力を育てる

時数	学習内容	身に付けさせたい資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1・2	①《マイコン》01 ②小学校・中学校での国語学習を振り返る。 ③「意図的に国語を学ぶ」を定義する。	①話し手を見て、聴くことができる。 ②「学ぶ=受動的な学び」でなかったかを検証できている。 ③「意図的に学ぶ」とこと「自然に身につく」とことの違いが理解できる。 【知識、思考力、表現力】	・マイコン ・論理教材A →今までの学習スタイルを検証する。(個の学び) →グループで「意図的に学ぶ」ことを定義する。	【主体的な学び】自分が興味・関心を持っている事柄を、1週間に1つピックアップする。 【対話的な学び】最初の授業なので、グループ内での「話す順番」をあらかじめ指示し、全員が発言できるようにする。 【深い学び】日本語(力)は「自然に身についた」ことを自覚させるとともに、そのことのメリットとデメリットを考えさせる。	・マイコンへの取り組み
3・4	①《マイコン》02 ②「言語・認識・コミュニケーション」を定義する。 ③日本語の構成単位を整理する。 ④「論理的であること」を定義する。	①話し手を見て聴くことができる。 自分の気持ちを態度に表しながら、聴くことができる。 ②④語彙的な定義ではなく、現象的に定義できる。 ③知識の不足の有無を確認している。 【知識、思考力、表現力】	・マイコン ・論理教材A →言語・認識・コミュニケーションについて定義する。(個の学び) →個の定義を持ち寄り、グループで定義をまとめ上げ、全体に発表する。 ・論理教材B	【主体的な学び】自分が興味・関心を持っている事柄を、1週間に1つピックアップする。体験により定義する。 【対話的な学び】生徒一人ひとりが、グループワークの中で「日本語運用能力は個人差が大きい」ことに気づくことができる発問をする。 【深い学び】言語、認識、コミュニケーションの不可分性について着目させる。	・マイコンへの取り組み ・論理教材Aの取り組み
15・16	①《マイコン》08 ②説明的文章の聴解Ⅰ C:グループで「論理マップ」を作成する。 D:マップ・デザインを試行する。	①発表者のPREPを意識して聴くことができる。 自分に置き換えながら聴くことができる。 ②自分たちにとって最善の「論理マップ」を見つけていく。 【技能、思考力、判断力、主体性、多様性、協働性】	・マイコン ・聴き取りメモとワークシートを持ち寄り、「論理マップ」を作成する。 →「論理マップ」を使ってプレゼンテーションを行う。 ・相互評価	【主体的な学び】自分が興味・関心を持っている事柄を、1週間に1つピックアップする。 【対話的な学び】グループでの話し合いでは、モデレーターを中心に議論を深めさせる。 【深い学び】「論理マップ」とは「見ることができない頭の中を見る化したものであることを指示する。	・マイコンへの取り組み ・「論理マップ」
17・18	①《マイコン》09 ②説明的文章の聴解Ⅱ A:クリティカルに聴く。(うなずきと首かしげ) B:聴き取りメモをPREPに落とし込む。 C:「論理マップ」を作成する。 D:「論理マップ」に基づいてプレゼンテーションする。	①発表者のPREPを意識して聴くことができる。 自分に置き換えながら聴くことができる。 ②聴解→グループ議論→「論理マップ」→プレゼンテーションまでの一連の思考過程をよどみなく実現できる。 【技能、思考力、判断力、主体性、多様性、協働性】	・マイコン ・聴解 ・聴き取りメモの整理とワークシート記入 ・相互発表、内容整理 ・付箋の作成と「論理マップ」デザイン ・相互プレゼンテーション ・自己評価、相互評価	【主体的な学び】自分が興味・関心を持っている事柄を、1週間に1つピックアップする。「論理マップ」の自分のデザインを提案する。 【対話的な学び】「感覚(感情)的な落としどころ」で満足するような話し合いにならないように巡回確認をする。 【深い学び】「論理マップ」のデザイン根拠を確認することを通して、思考過程を端的に具現化するためのよりよいマップを検討させる。	・ワークシートの評価 ・付箋の内容についての評価 ・「論理マップ」のデザイン根拠についての評価 ・プレゼンテーションの巧拙は評価しない

*加藤先生作成の単元の指導計画を元に編集部で作成。単元の指導計画の1学期全18時間分は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト(<https://berd.benesse.jp/>)からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

生徒の声



根本夏妃さん 加藤先生の授業で、「聴く力」が鍛えられていると感じます。マイコンで、最初にコメントーターになった時は、自分の意見を即座に組み立てることが難しかったのですが、自分がコメントーターでない時でも、自分ならどんなふうに発言するか考えるようにしたところ、それからはスムーズに発言できるようになりました。



養田陸人さん 加藤先生からは、発言の際、聴き手に、分かりやすく、いように話を構成するよう指導を受けました。その点に気をつけるようにしたところ、最近では論理的に話せるようになりました。グループで「論理マップ」を書く上で大事なのは、テーマと主張が合っているかを確認することだと思えます。その2つに整合性があれば、その間の思考過程も大体同じはずだからです。もし、整合性がとれていなければ、思考過程をさかのぼり、どこが間違っているのかメンバーと確認し合います。今回の文章には、難しい語彙がたくさん含まれていて、一度聴いただけでは理解できなかった部分もありました。しかし、分からなかった部分も、メンバーが自分の言葉でかみ砕いて説明してくれたので、内容の理解がさらに深まりました。

がさらに深まりました。

若手教師を中心とした学校改革

3年間の体系的な指導計画を策定し、生徒の自律的な学習意欲と進路意識を醸成

変革のステップ

背景と課題

- やりたいことへの挑戦をためらう生徒が多かった
- 年度によって学習指導や進路指導の目標や取り組みが異なり、生徒の学習意欲や進路意識を醸成するよい取り組みが引き継がれにくい傾向があった

実践内容

- **「コアスクール委員会」を設置** 静岡県教育委員会の学力向上事業の指定を受け、指導改善に意欲的な若手教師で構成された「コアスクール委員会」を設置。同委員会が学校改革を推進することに
- **「スパイラルアッププログラム」を策定中** 同委員会が3年間の学習指導や進路指導を体系化した「スパイラルアッププログラム」を策定し、活用するアセスメントや面談の時期を全学年で統一するなど、全校体制での指導改善を目指している
- **「探究プログラム」を策定** 生徒が広い視野から自分のやりたいことを見つけられるよう、同委員会が国際的な課題に向き合う「探究プログラム」を策定

成果と展望

- 学習意欲や進路意識を高める生徒が増え、自ら設定した目標の実現に向け、粘り強く取り組むようになった

PROFILE



校是「文武両道」の下、主体的に社会貢献を図る生徒を育成する。学力向上を目指し、学習指導を充実させるとともに、部活動にも力を入れており、弓道部やレスリング部などが全国大会への出場実績を持つ。

設立 1963 (昭和38) 年
形態 全日制/普通科/共学
生徒数 1学年約280人

2019年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、東北大、横浜国立大、静岡大、名古屋大、静岡県立大などに88人が合格。私立大は、東京理科大、明治大、立教大、立命館大などに延べ517人が合格。

住所 〒425-0086 静岡県焼津市小土157-1

電話 054-628-6000

Web site <http://www.edu.pref.shizuoka.jp/yaizuchuo-h/home.nsf>

よい取り組みが引き継がれるよう、教師間の連携の強化を図る

静岡県立焼津中央高校は、2017年度から、より高い学習意欲と進路意識を持った生徒の育成を目指し、指導改善を推進している。

同校の生徒は真面目で素直であり、生活態度も落ち着いているが、「皆と同じでよい」といった意識が強く、やりたいことが見つかっていても、挑戦をためらう傾向が見られた。また、以前は年度ごとに学習指導や進路指導の目標や取り組みが異なり、生徒の学習意欲や進路意識を思うように醸成できない時期もあったという。そうした中、14年度入学生生の学年団では、生活指導を立て直しつつ、生徒一人ひとりに向き合うな

ど、きめ細かな指導を3年間継続した。すると、自己理解を深め、自分の学習や進路と主体的に向き合う生徒が増えていった。その成果は大学進学実績に表れ、17年度入試では、京都大学や大阪大学といった最難関国立大学の合格者数が過去最多になったと、小関直樹校長は語る。

「本当に進みたい道を探ったり、高い目標を設定して挑戦しようとしたりする意欲を育んだことが、大学進学実績に結びついたのだと思います。そうした取り組みを学校全体で継承し、発展させていきたいと考えました。また、『大学入学共通テスト』が始まるなど、制度が大きく変わる21年度入試への対応を全



校長 小関直樹 おせき・なおき
教職歴33年。同校に赴任して3年目。「生徒が自分に自信を持てるよう、達成感や成就感が得られる学校づくりに力を入れたい」



教務主任・コアスクール委員 古谷桂吾 ふるや・けいこ
教職歴19年。同校に赴任して4年目。「新しいことはやってみなければ分からない」という姿勢で、挑戦を続けていきたい」



進路主任・コアスクール委員長 露木隆 つゆき・たかし
教職歴13年。同校に赴任して8年目。「目の前の生徒とともに学び、ともに成長し続けたい」



コアスクール委員(探究学習担当) 山梨達也 やまなし・たつや
教職歴5年。同校に赴任して6年目。「自分で考えて行動できる社会人になれるよう、生徒を導くことができる教師でありたい」

校体制で推進していけるよう、教師間の連携を強めたいという思いもありました」

指導改善に意欲的な教師のアイデアが、学校を動かす

17年度には、静岡県教育委員会の「学力向上ネオアドバンス事業」の指定を受けるとともに、学校改革案を立案・実践する部署「ネオアドバンス委員会」を設置して、20〜30歳代の教師を委員とした。同事業は、18年度、「魅力ある学校づくり推進事業」における「学力向上コアカール」に改編されたが、同校は改めてその指定校となり、「ネオアドバンス委員会」も「コアカール委員会」と改称した。

「初めから全教師の合意形成を図るのは、現実的ではありません。まずは、指導改善に意欲的な若手教師が学年や教科の枠を超えて集まり、学校を動かしていったらいいと考えました」(小関校長)

同委員会は、学習指導を中心に新しい取り組みのアイデアを出し、実現させていった。その1つが、生徒の大学入試への意識づけを強化する取り組みだ。例えば、2年次の3学期を「3年生ゼロ学期」とし、模擬試験の振り返りをさせたり、春季休業期間に苦手分野を克服できるように学習計画を立てさせたりした。また、3年生の1学期には、外部講師による近年のセンター試験の出題傾向などについての説明会を実施し、生徒に夏季休業期間からセンター試験本

番までの学習計画も立てさせることにした。そして、進捗状況を点検し、計画通りに学習できていない生徒には、その要因と改善策を考えさせる指導をするよう、3年部の教師に呼びかけている。

同委員会では、進路指導の改善も最重要課題として位置づけ、取り組みを工夫している。具体的には、1年生に向けた進路説明会では、全国の国公立大学や私立大学十数校の職員を講師として招き、自大学における研究の特色や設備などを紹介してもらっていると、進路主任でコアカール委員会委員長の露木隆先生は話す。

「生徒には、偏差値や知名度ではなく、学びたい学問から大学を選んでほしいと思っています。そこで、説明会では、なるべく多くの大学を取り上げるよう心がけています。また、本校の卒業生に自分の大学生活の面白さや大変さなどを語ってもらった動画を紹介することもあります」

同委員会が実践を続ける中で、次第に指導改善に前向きに取り組む教師が増えていった。

「生徒の学習習慣を定期的に測るためにアセスメントを活用したり、生徒がさらなる高みを目指すよう励ましたりする教師が全学年で目立つようになりました。指導改善の必要性について、教師間での合意が進んだことの表れでしょう。そうした変化は、同委員会が積極的にアイデアを出し、動いたからこそ生じたのだと考えています」(小関校長)

目標設定と振り返りを徹底し、自ら学びに向かう生徒を育成

19年度、同委員会は、新たに2つの取り組みを始めた。

1つは、どの教師が担任をしても一定の水準で指導できるよう、3年間の学習指導や進路指導を体系化した「スパイラルアッププログラム」の策定だ。18年度から同委員会が中心となり、先進校の取り組みなどを参考にした試案を作成し、合議を重ねて形にしていた。具体的には、生徒の学力や学習習慣の定着度を定期的に測れるよう、1・2年次に2回ずつ、3年次に1回、「高校生のための学びの基礎診断」として「スタディーサポート」を実施。学年団・教科団が協働してその結果を分析し、指導に反映させていく。また、スタディーサポートや模擬試験、定期考査、文化祭や体育祭、進路講話といった学校行事全般にわたって、事前事後に「Classi」(※1)でアンケートを配信し、目標設定と振り返りを必ず行わせることにした(図1)。それには、生活の充実と学習への意欲喚起を結びつけようという大きなねらいがあった。

「自分で立てた目標であれば、生徒はその達成を目指し、計画的に行動します。思い通りの結果が得られれば、さらに頑張ろうという意欲につながります。また、結果が不満ならば、その要因を考え、取り組む方法を工夫するきっかけになるでしょう。アセスメント

や定期考査を軸に、学校生活のすべてを学びとして捉えさせ、生徒一人ひとりの意識を学習に向けさせたいと考えました」(露木先生)

生徒が学習計画を練り直す機会として面談を重視し、各学年で年4回設定。例えば、1・2年生の面談では、学習習慣の確立をどう図るのか、自分の強みや課題は何なのか、強みを伸ばしたり、課題を克服したりするために、今後どのように学習を進めていくのかなどについて、生徒にプレゼンテーションをさせることにし

図1 1年次での「Classi」のアンケート配信計画(抜粋)

項目	4月	5月	6月
①学習における特徴等	• 学びの基礎診断の振り返り	• 中間考査の目標・計画設定 • 中間考査の振り返り	
②行動の特徴等	• HRデーの振り返り	• 思春期セミナーの振り返り • 野球定期戦の応援の振り返り • 文化祭の目標設定等	• 文化祭の振り返り
③部活動、ボランティア活動等		• 環境美化活動の振り返り	
④取得資格、検定等			
⑤表彰・顕彰等の記録			
⑥その他	• 進路希望調査 • 二者面談事前アンケート • 二者面談の振り返り	• 学習実態調査	

何事についても自律的にPDCAサイクルを回せる生徒の育成を目指し、あらゆる教育活動を通して目標設定と振り返りをさせるべく、3年間を見通した「Classi」のアンケートの配信計画を練り上げた。項目は、新しい調査書で拡充されることが予定されている「指導上参考となる諸事項」の欄に対応させ、6つとした。

* 学校資料を基に編集部で作成。

た。生徒が面談で話したい内容を整理できるように、面談の1週間前には、前回の面談後の学習における成果と課題を振り返らせるアンケートを○Q2で配信している。低学年の面談では、生徒自身に考えさせることを大切にしている

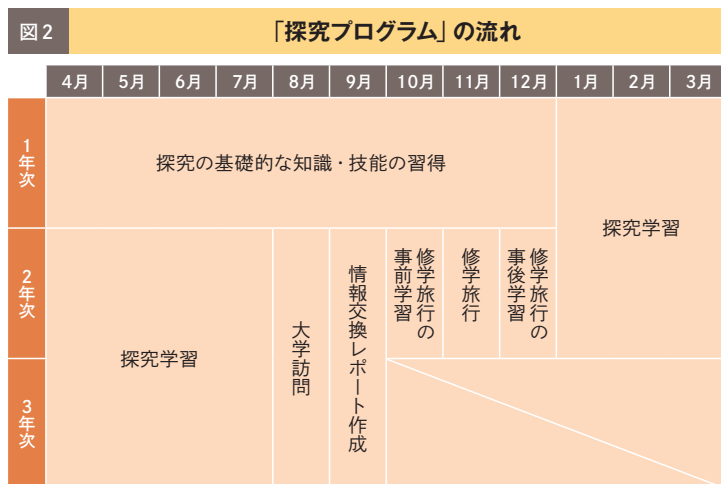
と、教務主任で、コアスクール委員の古谷桂吾先生は話す。

「教師が改善点を伝えるのは簡単ですが、そうした指導では、生徒は学習に主体的になりません。本校では、生徒が自分の強みや課題を分析し、学習のPDCAサイクルを回せるようになることを目指しています。そうなるまでには時間がかかるため、低学年からの意識づけが必要です。そのため、教師は面談で生徒が示した学習計画に課題を感じても、修正するよう指示するのではなく、その計画を立てた理由などを問いかけて、生徒が課題を自覚できるように促すことにしています」

今後は、定期考査やスタディーサポートなどの結果から、3年間でつけさせたい学力・学習習慣を明確にし、それを基に各学年における指導の到達目標を設定しようと計画だ。

「学年の到達目標を定めることで、教師は各学期の指導で何を指すのかも見えてきます。各学期の目標を達成できるよう、日々の指導に力を入れ、その成果を定期考査やアセスメントでしっかり測ろうとするでしょう。そうして、指導と評価の一体化を実現させていきたいと考えています」(露木先生)

* 1 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。



2年次のハワイへの修学旅行も「探究プログラム」の一環として位置づけ、日本との文化の違いなどと向き合わせる。 *学校資料を基に編集部で作成。

国際的な課題と向き合わせ、生徒の進路への視野を広げる

もう1つの取り組みは、生徒がSDGs（2）の目標を基にテーマを設定して行う「探究プログラム」の策定だ（図2）。19年度は1・2年次のみで行うが、20年度からは全学年での実施を予定していると、コアスクール委員の山梨達也先生は語る。

「SDGsの目標は日常生活とのかかわりが深いため、生徒は国際的な課題を自分事として捉えやすいでしょう。また、そうした課

題に取り組みながら視野を広げ、多様な選択肢の中から、自分が学びたい学問や、社会でやりたいことを見つけられるようになってほしいという思いもありました」

同プログラムの中軸を担うのが、異学年間の交流の機会である2学年合同での活動だ。まず、1年生は1月に、SDGsの目標の中から関心のあるものを1つ選択。同じ目標を選んだ生徒同士でペアを組み、目標に関連した探究テーマを設定する。そして、1年次に似た探究テーマを設定した2年生のペアと4人1組のグループになり、2年生・3年生に進級後の9月まで、週1回の協働学習を行う。その活動スタイルは、山梨先生が部活動をヒントに考案した。

「私が顧問を務める吹奏楽部では、上級生が下級生に手本を示す場面が多くあります。上級生はリーダーシップを発揮する中で、自分の演奏を振り返り、気づきを得るようです。また、上級生の姿に刺激を受け、練習により意欲的に取り組むようになる下級生が目立ちます。探究学習でも、異学年の生徒間の交流を通して学びを深めさせようと考えました」

2・3年次の夏季休業期間には、グループの4人それぞれが、探究テーマと密接にかかわる研究を行っている大学のオープンキャンパスに参加。9月には、そこで得た学びや気づきを一人ひとりがレポートにまとめる予定だ。

「同じテーマでも、多様な研究のあり方があることを学べるよう、異なる大学を訪問さ

せたいと考えています。生徒同士でレポートを読み合えば、参加していない大学の様子も分かり、大学選びの参考になるでしょう」（露木先生）

地域から求められる学校で あり続けるために

同委員会が推進してきた一連の取り組みにより、生徒は学習意欲を高めるとともに、やりたことに積極的に挑戦するようになった。

「何事にも主体的に向き合い、自分で定めた目標の達成に向けて力を尽くすようになりました。本校では、最難関国立大の合格者が増加傾向にあります。これも、生徒が粘り強く学習に取り組んでいることの表れだと考えています」（古谷先生）

今後は、取り組みをさらに充実させていく。例えば、20年度の「探究プログラム」では、SDGsの目標と関連した研究に力を入れている大学教員を招き、生徒に探究方法などを個別にアドバイスしてもらう予定だ。

「いずれは、現在の指導改善を推進している教師が異動したり、本校が静岡県教育委員会の事業の指定校でなくなったりすることもあるでしょう。それでも指導改善を継続していくためには、教師間で課題意識を共有するとともに、保護者や外部機関との連携強化が欠かせません。今後も情報発信に力を入れていきたいと考えています」（小関校長）

* 2 Sustainable Development Goalsの略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。

兵庫県立川西明峰高校

E S Dを軸にした学校改革

ユネスコの精神にのっとり
学校改革により、生徒が
自分に誇りを持てる学校に

変革のステップ

背景と課題

- 高校入試における複数志願制の導入や学区拡大などにより、入学者の学力の幅が広がり、その影響で進学実績が伸び悩む。自己肯定感・有用感が低く、チャレンジする意欲を持ってない生徒が少なくなかった

実践内容

- **ユネスコスクールを目指す** 生徒の自己肯定感を高めるためにE S Dを軸にした学校改革を行い、学校の特色化を図った
- **すべての教育活動とSDGs (*1) の関連を整理** 全教科・科目のシラバスにSDGsの17分野との関連性を明記。各行事とのかかわりも明確にした
- **グローバルな取り組み** 持続可能な開発のための教育(E S D、*2)に基づいて改革。グローバル精神を涵養するとともに、ボランティアや地域連携を通して、ローカルへの視野を広げる

成果と展望

- 教師がE S Dの意義を理解し、改革を推進
- 地域の課題に関心を持ち、自信を持ってチャレンジできる生徒が増えた

個に応じた生徒指導に 力を入れる

兵庫県立川西明峰高校は、1学年の約半数が大学・短大に進学する学校だ。以前は、国公立大学や難関私立大学の合格者を数多く出していたが、県立高校入試における複数志願制の導入や学区拡大などにより、入学者の学力の幅が拡大。その影響で進学実績が伸び悩んだことを受け、生徒の変化に応じた学習指導や進路指導の確立が課題だった。

ただ、それ以上に教師が課題に感じていたのは、自己肯定感や自己有用感が低い生徒が少なくないことだった。教育情報部長の吉澤孝雄先生は、次のように語る。

PROFILE



自主・創造・礼節・友愛を理念とする。2017年度からユネスコスクール加盟に向けた改革に着手。「高校生心のサポートシステム研究開発校」「県立高校特色づくり推進事業」を推進中。野球部は甲子園出場経験もある強豪。

設立 1976(昭和51)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 1学年約280人

2019年度進路実績(現役のみ) 公立大は、都留文科大に1人が合格。私立大は、追手門学院大、関西大、近畿大、関西学院大、甲南女子大、神戸学院大などに延べ122人が合格。短大、専門学校進学114人。就職16人。

住所 〒666-0006 兵庫県川西市萩原台西2-324

電話 072-757-8826

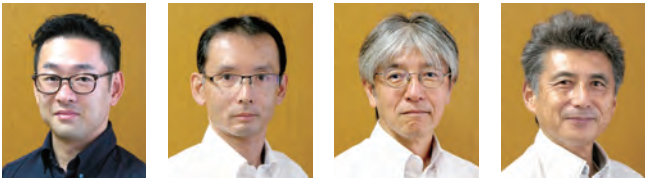
Web site <http://www.hyogo-c.ed.jp/~meiho-hs/>

*1 Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。

*2 Education for Sustainable Development の略。「持続可能な開発のための教育」と訳される。環境、貧困、人権、平和、開発などの様々な課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組んで問題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すことにより、持続可能な社会の創造を目指す学習や活動のこと。

「本当に行きたい大学や専門学校があっても、楽に実現する進路を選択するなど、何をしようにも『自分には無理』と言って、チャレンジしない生徒が少なくありませんでした。生徒の自己肯定感を高め、夢や希望を持つて進路を実現する姿勢を養うとともに、生徒が自分に誇りを持てる学校を築くことが必要でした」

まずは、生徒との信頼関係の構築を第一に考えた。「明峰の生徒はこうあるべき」といった一律の理想像を押しつけるのではなく、生徒一人ひとりの個性や考え、特性を踏まえた「個に応じた指導」を、教師一人ひとりが意識して



中川透 なかがわ・とおる
校長
教職歴37年。同校に赴任して1年目。「生徒とともに自分も成長するべし。生徒を動かす、生徒の力を伸ばす。教育が平和を生む」

桜井英樹 さくらい・ひでき
キャリア推進部長
教職歴35年。母校に赴任して5年目。「生徒の夢に寄り添い、その実現のためにともに歩む」

吉澤孝雄 よしざわ・たかお
主幹教諭、教育情報部長
教職歴28年。同校に赴任して3年目。「学びの楽しさを伝えるため、生徒とともに学び続ける教師でありたい」

松井健太郎 まつい・けんたろう
企画広報部GC-ASPNET(※3)委員長
教職歴7年。同校に赴任して3年目。「想像力と創造力を大切に。潜在的な『どうせ』という思い込みの壁をなくしたい」

生徒指導にあたった。

ただ、生徒が自分に誇りを持てる学校にする学校改革をしたいという教師の思いはあったが、生徒指導に時間を割く日々が続く、学校改革の足取りは重かった。

各教科・科目とSDGsの関係をシラバスに示し学ぶ意味を伝える

転機が訪れたのは、2017年4月のことだった。安岡久志前校長が赴任し、ユネスコスクールへの加盟を目指すことを宣言したのだ。ユネスコスクールは、ユネスコ憲章に示された理念を実現するために平和や国際連携を推進する学校のこと、持続可能な開発のための教育(ESD)を行う。安岡前校長から託された思いを、中川透校長は次のように語る。

『自分たちの学校は、ユネスコスクールだ』という自覚を持つことで得られる自己肯定感、地域や世界の問題解決に向けて活動することによる自己有用感、そして、自分たちにも地域や世界を変える何かができるという自己効力を高めたいという思いから、加盟を目指しました。生徒同士、生徒と教師が対等に学び合いながら、世界や地域に目を向け、持続可能な未来を切

り開く意欲を育むことが、本校の目指す教育です」

17年8月、ユネスコスクール加盟の審査対象となるチャレンジスクールに認定され、学校改革が始まった。まず着手したのは、「総合的な学習の時間」や地域連携、国際理解教育など、今行っている教育活動をESDの観点から整理し、可視化することだった。それによって、取り組みの新たな価値を見だし、SDGsとも結びつけることで、教育の質の向上を図ろうと考えたのだ(図1)。

SDGsの理念を教育活動に落とし込む工夫の1つとして行ったのが、シラバスの改訂だ。



* 学校資料をそのまま掲載。

* 3 ユネスコスクール・プロジェクト・ネットワークの略称。

各教科・科目で学ぶ内容が、SDGsのどの目標に関連しているかをシラバスに示したのである。例えば、「国語総合A」は「質の高い教育をみんなに」「ジェンダー平等を実現しよう」「人や国の不平等をなくそう」「平和と公正をすべての人に」に、「数学A」は「質の高い教育をみんなに」と「産業と技術革新の基盤をつくろう」に関連づけた。

「学習内容とSDGsの関連をシラバスに明記することで、教師はSDGsを意識して授業を行います。そうすることで、生徒は授業が世界を変えることにつながると意識でき、目的を持って学びに向かえると考えました」(中川校長)

体育大会や文化祭、進路講演会などの行事についても、一つひとつがSDGsのどの目標に関連するのか、準備の場面やプログラムを通して生徒に語りかけ、SDGsとの結びつきを意識して取り組めるようにした。

ユネスコの精神にのっとり、グローバルの問題に取り組む

具体的な取り組みは、ESDを象徴する「Think globally, act locally」の精神にのっとり、グローバルとローカルを両輪に進めている。地球規模の問題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことが、問題解決につながる新しい価値観や行動を生み出すという考え方だ。

そこで、生徒が身近なところから問題を考え

られるよう、地域と協働で行うのが「明峰の学び」だ。それは、14年度に「総合的な学習の時間」の一環として始まった地域人材による教養講座で、同校の教師、大学教授、NPO法人の方などを講師として、25講座を開講している(*4)。

対象は1・2年生で、クラス・学年を超えて希望の講座を1つ受講する。各講座は4回で構成。例えば、車いすの体験では、車いすに乗って校外に出て、自動販売機でジュースを買う。それだけの行為の中でも、生徒は「段差が怖かった」「小銭を入れる位置が高くて苦労した」といった感想を持ち、課題意識が生まれる。また、2〜3時間かけて学校に通学するというネパールの教育事情を知り、学ぶことの意味を自問する生徒もいる。1月には、それらの学びを基に、講座で学んだことや感じたことをレポートにまとめ、2月に発表会を行う。

生徒アンケートでは、9割以上が講座の内容に満足し、興味・関心が高まったと回答している。キャリア推進部長の桜井英樹先生は、同講座の成果を次のように語る。

「自分の知らない世界を見て、体験して、視野を広げることが、本講座のねらいです。最初は関心がなくても、「面白かった、視野が広がった」という生徒は少なくありません。関心のなかつたことに魅力を見つけている経験が、様々なものに興味・関心を持つきっかけになると期待しています」

また、生徒の自己有用感を高めるために、地

域でのボランティア活動の機会も多く提供している。地域イベントへの参加、幼稚園児との風揚げ大会や絵本の読み聞かせ、小・中学校を訪れて行う学習支援などだ。それらのボランティア活動は希望制で、参加は生徒の自主性に任せているが、多くの生徒が参加している。

学校の特徴となるGC類型の改革

一連の取り組みの中で最大の改革は、GC(グローバル・キャリア)類型(*5)の見直しだ。GC類型は、国内外で活躍するグローバル人材の育成を目的に設置された類型で、海外の姉妹校とのオンラインによる交流、韓国語・インドネシア語による多言語教育などを行っている。同校の特色となる類型であり、ユネスコスクールを目指す上でも、GC類型の改革は急務だった。

18年度、GC類型の統括責任者に就任した企画広報部の松井健太郎先生は、次のように語る。

「GC類型のカリキュラムを見た時、3年間を通して育てたい生徒像が明確ではありませんでした。そのため、学年団や指導する教師によって指導にぶれが生じ、生徒も自分にとってどのような資質・能力が身につくのかという見通しが持てていないのだと思いました。生徒がGC類型に何を求めているのか、教師はどのような生徒を育てていくのかといった点を明確化する必要がありました」

松井先生が改革に向けて最初に行ったのは、

*4 2018年度は、保育、プログラミング、絵本、介護支援、手話、点字、車イス体験、災害・防災、子どもの貧困などのテーマで実施された。

*5 GC類型の募集人員は入学定員の10%で、小論文・面接・英語実技による特色選抜入試で選抜。2年生からは、複数志願選抜で入学した生徒たちも、GC類型に進むことができる。

生徒との面談だ。

「生徒不在の学校改革はあり得ません。常に生徒との対話を重視し、小さな声にも耳を傾けながら、生徒とのかかわりの中であらゆる教育活動を進めました。GC類型の改革についても、まずは生徒の声を反映させたいと考えました」（松井先生）

松井先生は、18年4月から1か月半にわたって、GC類型を選択した2年生約60人に面談を実施。GC類型を選択した理由を聞いたところ、「進学に有利だと聞いた」「英語が話せるようになりたい」など、様々な声が上がった。さらに、各学年団に対して、GC類型にふさわしい生徒像について調査。それらの結果を基にGC類型のアドミッション・ポリシー（AP。求める生徒像）を打ち出した（図2）。APは、特色選抜入試にも反映し、小論文には、主体性を発揮した経歴や入学後の抱負について尋ねる問いが設けられた。

図2 アドミッション・ポリシー

- 1 授業を中心としたあらゆる教育活動に主体的に取り組み、学校・学年の代表を担う生徒
- 2 国内外を問わず様々な人と連携・協働し、積極的にコミュニケーションを行う資質を有する生徒
- 3 人文・社会科学における基本的な理解を深め、論理的思考力を鍛えることによって、科学的に考察し、英語とICTを用いて表現する能力や態度を身につける意欲のある生徒

*学校資料を基に編集部で作成。

世界を身近に考えられるよう、生徒も教師も

海外との交流を充実させ、学びあいを行っている。例えば、18年6月にはインドネシアの生徒を、10月にはオーストラリアの姉妹校の生徒を招き、対面による交流を実現。19年3月には海外からの大学生と英語漬けの校内キャンプを3日間実施した。教師を、2年連続で韓国や中国のユネスコスクールに派遣。19年1月には、韓国のESDの関係教職員を受け入れた。

また、18年度からGC類型の2年次必修科目「GCI」で、探究学習を行うことにした。その研究成果は、18年度、大学主催のイベントや兵庫県教育委員会主催のフォーラムなどで発表し、同校として初めて、甲南大学の探究活動発表会で入賞を果たした。

「GC類型の取り組みで本校が目指しているのは、社会や人生に向かう態度の育成です。不確実性の高い社会において、自分で進むべき道を選び、自分の可能性を切り開く力をつけさせたいと考えています」（松井先生）

学校教育でESDに取り組む意義を見いだした教師たち

安岡前校長がユネスコスクールを目指すと言った当初、教師たちは戸惑ったという。中でも多かったのは、生徒指導が大変な状況で、新しいことに取り組む余裕はないといった声だった。しかし、研修やワークショップを重ね、ESDやSDGsの意義が浸透するにつれて、改

革に肯定的な声が聞こえるようになった。

「パートナーシップ、平和と公正、不平等の是正などを目指すユネスコの精神と、安全・安心な学校づくり、教師と生徒とのコミュニケーションや協働の大切さを追究してきた本校の教育活動が根底でつながっていると、研修などを通じて感じ取った先生方が多かったのではないだろうか。生徒指導を大切にす

る本校がユネスコスクールを目指すことに矛盾はないと、私たち教師が気づいたことが、改革を推進させる力になったのだと思います」（吉澤先生）

改革に自信が持てたことで、ICTの活用や探究学習の導入など、自ら授業改善に取り組む教師が増えた。生徒も視野が広がり、社会課題を身近に考え、ボランティア活動に参加している。探究学習の成果を生かしてAO入試で大学に合格する生徒も出るなど、生徒が自己肯定感を高める様子が少しずつ見えてきたという。

今後の課題は、校内にESDやSDGsの意義をさらに浸透させ、地域の拠点校としてユネスコの精神を普及していくことだ。

「ユネスコの理念を実現するためには、教育活動の成果を学校内にとどめるのではなく、校外に積極的に発信していく必要があります。教師・生徒が自分たちの言葉でESDの価値を発信できるよう、さらなる普及と教育環境の整備に努めていきたいと考えています」（松井先生）

自校の指導ツールを他校の教師とともに検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。今回は、生徒一人ひとりの希望進路の実現を後押しするための志望校検討会で活用する資料について議論した。

Before

高2 [20XX年度] 成績

模擬試験①

英語	オール	数総合	数必須	数選択	国語総合	国語	古文	漢文	総合1	3教科	総62								
71.1	171	65.3	151	67.2	128	55	23	109.3	139	63.2	75	34.5	44	57.4	22	68.2	146.1	100	69.9
70.6	181	67.6	153	67.9	124	61.1	29	105.6	111	64.2	69	63.3	23	59.2	19	66.9	143.3	100	71.3

模擬試験②

英語	数学B問題	国語	日本史	世界史	地理	倫理	物理/物理基礎	化学基礎	生物基礎					
74.3	52	52	65.9	64	56	46	54.6	42	78.5	95	36	72.8	28	62.8

模擬試験③

英語	リスニング	英1	数1A	数1B	数1C	国語	物理	化学	生									
70.9	189	74.4	40	70.9	71.2	92	60.5	65	66.8	157	57.2	67.2	69.4	104	82.5	140	67.9	67.9

志望校判定

第1希望	高2記述1回				高2記述2回				第9希望
	大学名	学部	学科	判定値	大学名	学部	学科	判定値	
第1希望	東京一橋	文系二類	商	C	東京一橋	文系二類	商	C	慶徳
第2希望	横浜国立	経済	経一経済	C	横浜国立	経済	経済	A	早稲田
第3希望	慶應義塾	経済	経済	C	慶應義塾	商	商	A	一橋
第4希望	早稲田	政治経済	政治	C	早稲田	政治経済	経済	A	横浜
第5希望	明治	政治経済	経済	A	明治	政治経済	政治	A	明治
第6希望	青山学院	経済	経済	A	青山学院	経済	経済	A	千歳

高1 [20XX年度] 成績

模擬試験④

英語	オール	数総合	数必須	数選択	国語総合	国語	古文	漢文	総合1	3教科	総62								
72.5	181	73.2	182	72.7	144	66.6	38	100.8	110	63.2	75	34.5	44	57.4	22	68.2	146.1	100	69.9

模擬試験⑤

英語	数学	国語	総合									
77月記述	78.6	90	S1	70.6	78	S3	61.5	58	A2	74.0	227	S1
7月記述	80.2	81	S1	63.6	58	A2	64.3	86	A1	73.7	197	S2

模擬試験⑥

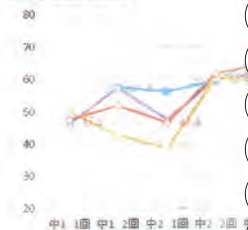
英語	数学	国語					
7月	72.0	86	S2	66.2	83	A2	68.8

中学 [20XX ~ 20XX年度] 成績

模擬試験⑦

英語	数学	国語	総合									
中1 1回	46.3	52	B2	56	63	B2	47.6	116	B2			
中1 2回	57.3	61	A3	57.4	70	A3	42.8	33	G1	52	164	B1
中2 1回	66	76	A3	47.6	48	B2	36.8	32	C2	46.7	156	B2
中2 2回	59.3	60	A2	60.1	62	A2	60.3	75	A1	61.8	197	A1
中3 1回	67.7	90	S3	61.5	73	A2	58.9	73	A2	64.9	236	S3
中3 2回	72	81	S1	63.4	62	A1	56.8	77	A2	67	230	S2

偏差値の推移



東京都・私立
佼成学園女子中学校
佼成学園中学校
西村準吉先生提供

「志望校検討会資料」

課題

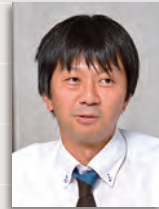
- 1 多面的・総合的評価の入試に対応できるように、現状の検討会資料を見直したい
- 2 検討課題が絞られず、会議時間が長時間にわたってしまう
- 3 検討会で教師たちから出された情報を、担任が活用できる形で残したい

検討メンバー



ツール提供者

東京都・私立
佼成学園女子中学校
佼成学園中学校
西村準吉
にしむら・じゅんきち



北海道旭川東高校
花尻健明
はなじり・たけあき



埼玉県・私立
武南中学校・高校
岡本眞一郎
おかもと・しんいちろう

東京都・私立佼成学園中学校では、3年生での志望校検討会を6、12、1月に実施している。生徒の学力や志望校の合格可能性など、担任が進路指導や学習指導に活用できる情報を共有することが目的だ。ただ、多面的・総合的評価の入試の拡大で、学力という定量データだけを用了検討に限界を感じ始めていた。加えて、入試方式の複雑化に伴い、指導に必要なデータは増えるが、すべてを資料にすることは難しく、検討会の所要時間も増加していた。検討会を効率的に進めるためには、どうすればよいのか、また、どうすれば検討会後に担任が行う面談で役立つ情報が共有できるのが課題だった。

担任が指導に活用できる情報を出し合える検討会にしたい

3年生 2学期 志望校検討会資料

After


改良ポイント

① 予想される検討課題をあらかじめ明確化し、議論の論点を絞りやすくする

検討会資料上の定量データから考えるべき課題を、あらかじめ明確化。何について議論すればよいのか、検討会出席者が論点の目線合わせをできるようにした。

② 検討会出席者は生徒の情報やアドバイスをシートに記入し、担任に共有する

検討会出席者が情報や指導のアドバイスをその場で書き込み、担任に共有できるようにする記入シートを新たに開発した。定性データは準備しなくても、その場でまとめてもらえる。



高2 [20XX年度] 成績

模範試験①

模範試験②

模範試験③

志望校判定

高1 [20XX年度] 成績

模範試験④

模範試験⑤

中学 [20XX～20XX年度] 成績

模範試験⑦

検討結果の記入シート

_____年 _____組 先生へ 記入者 _____

生徒番号	生徒名
------	-----

学力と志望校の難易度から考えられる合格の可能性

志望校の入試科目と生徒の学力から見て、強化すべき教科・科目、今後の学習指導のポイント

検討する課題の□に✓を入れる

性格や特性を考慮した学習指導や進路指導の方針

本人の学力・志向と、志望校の条件・傾向（入試科目、センター試験と個別学力検査の比率など）との整合性

本人の学力・志向を踏まえた併願校の出願戦略

成績などの定量データから見える課題

志望校、志望学部・学科、地元、現役合格へのこだわり

希望の職業と学問領域の整合性

本人の希望と保護者の意向の整合性

部活動での様子など、定性データから見える課題

生徒の課題に沿って情報を出し合いながら今後の指導の方向性を検討し、その一連の結果を検討会に出席した教師それぞれが記入するシートを開発することにした。シートには、従来の検討会資料上の分析すべき項目をあらかじめ記載。加えて、部活動引退後の学習の様子など、3年生の2学期の検討会で共有すべきだが、数値だけでは読み取ることのできない項目も記載する。各教師からの定性情報などが集約されれば、担任が面談で生徒に確認すべき事柄や指導内容が整理される。また、指導経験の浅い教師でも指導に役立てやすい。生徒の状況に応じて項目を選択することで、論点が明確になり、検討会出席者は意見を出しやすくなるだろう。

検討会で出た情報を書き込み、担任に渡すシートを開発

次ページでは、3人の先生方の検討の様子をダイジェストで紹介！



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け → 生徒指導・進路指導ツール集」をご覧ください。



検討すべき論点を明確化し、 多様な視点から意見を集約

今後の志望校検討会では、多面的・総合的な評価へと転換する入試改革への対応の必要性から、模擬試験の偏差値や志望校の合格可能性以外の資料も必要だという声が上がった。ただ、事前に新たな資料を準備するのは負担が大きいため、検討会の場で出席者が出した情報を文字化して残すシートを作成することとなった。また、出し合ふべき情報や意見が分かるよう、あらかじめ定量データ等から検討課題を洗い出し、それらをシートの中に盛り込むという結論に至った。論点が明確化されることで、検討会の長時間化が

活用の流れ

- 1 担任が課題を感じている生徒、進路指導部が丁寧に検討したい生徒などを挙げる
- 2 検討会の出席者から出された今後の指導についての考えや、定量データからは分からない生徒の情報を、シートに記入する
- 3 記入したシートを材料として、担任は生徒との面談を行う

抑えられるという期待の声も上がった。シートは、検討会出席者全員に配布し、各自記入したものを担任に渡す方法や、シートを表計算ソフトで用意し、意見を入力しながら用紙1枚に集約して担任に渡す方法が提案された。

なお、多面的・総合的な評価による入試の拡大によって、指導の山場は早期化・複雑化が考えられる。多様な経験を持つ教師から異なる視点で意見を出し、生徒の背中を押す材料を増やす機会を設けることは、ますます重要になるのではないだろうか。志望校検討会は3年生1学期までに行うことが望ましく、英語の資格・検定試験の結果やポートフォリオなどの情報も必要になるという認識で一致した。

検討メンバーの先生に、自身の指導観や自校の生徒特性を踏まえて、 ツールの活用方法や留意点などをお話いただきました

生徒にアドバイスすべき事柄の優先順位を可視化

東京都・私立佼成学園女子中学高校 西村準吉 にしむら・じゅんきち



これまで検討会の記録はメモ程度だったので、生徒にアドバイスすべきことの優先順位が言語化されたシートは、担任には入試直前の面談での重要な資料になります。教師全員で検討した内容ですから、経験の浅い教師も自信を持って生徒と向き合えるでしょう。

本校ではAO・推薦入試の受験者が多いため、「OSG」(*)を利用してポートフォリオも検討資料に加えたいと考えています。ポートフォリオの項目は、調査書への記入項目に、AO・推薦入試の出願条件にされることがあるオープンキャンパスの参加履歴を加えたものにする予定です。検討会の実施は今3年生のみですが、多面的・総合的な評価による入試が拡大すれば、1・2年生でもポートフォリオに基づいた検討会が必要になるかもしれません。

入試の多様化によって、教師もすべての情報を把握するのは難しい状況です。「指導」という意識から脱し、生徒の持つ情報も取り込みながら、最適な「支援」を考へることが求められていると感じています。

西村先生プロフィール 教職歴23年。同校に赴任して19年目。教頭統括進路指導部長。佼成学園中学校の統括進路指導部長を兼務。「生徒が努力するための支援をし、自身も学び続ける存在として範を示す」学校プロフィール 全日制/普通科/女子校/1学年約210人/2019年度入試合格実績(現浪計)/国公立大は、筑波大、東京外国語大、大阪大、国際教養大などに18人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大などに延べ271人が合格。

検討する生徒を絞り、効果的・効率的な検討会に

北海道旭川東高校 花尻健明 はなじり・たけあき



本校では、3年生対象の志望校検討会はセンター試験後のみで、自己採点の結果と志望校の度数分布、本人の意志を基に出席指導の方針を確認します。学年のほぼ全員が国立大学志望のため、検討会が長時間になることが課題です。今後の一般選抜・総合型選抜を考えると、本校でも、生徒の活動履歴等も踏まえた志望校検討会を、3年生前期をめぐらして行う必要が出てくると考えています。また、今回の議論から、担任が進路指導上の課題を感じる生徒を重点的に取りあげる場面を増やしたいと思いました。

検討会で重視したいのは、生徒の希望進路の実現を後押しする材料をシートによって言語化し、生徒に自信を持たせられるよう、担任が面談に臨めるようにすることです。生徒の思いに寄り添う意識は全教師が持っているのですが、自己採点の結果にとらわれずに意見を出し合えると思います。シートをあらかじめ配布しておけば、生徒の志望のこだわり度など、検討に必要な情報も事前に担任が生徒に確認できます。

花尻先生プロフィール 教職歴12年。同校に赴任して5年目。進路指導部。数学科。「あたり前のことをあたり前に。感謝の気持ちをお忘れなさい。生徒が気づけることは気づかせよう。」

学校プロフィール 全日制・定時制/普通科/共学/1学年約280人/2019年度入試合格実績(現役のみ)/国立公立大は、旭川医科大学、北海道大、東京工業大、東京大、一橋大などに147人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、立命館大などに延べ225人が合格。

定性データの共有でより個に応じた指導につなげる

埼玉県・私立武南中学校・高校 岡本眞一郎 おかもと・しんいちろう



定量データが中心となる志望校検討会の資料に定性データを加えることで、指導に厚みが出ると感じました。本校では、特に生徒の学習意欲を高めることが課題です。生徒とのかかわり方が異なる先生方が、生徒を後押しするためにそれぞれどんな言葉をかけるべきか。一度に多様な意見を聞ける場にする一方で、指導の幅の広がりが期待できます。本番に弱いから私立大学の併願校を増やす、ケアレスミスが多いから見直しを意識させるといった、生徒の性格も考慮した指導は、多様な情報が出てくるからこそできることです。また、毎年の検討会で、校内と校外の各データを突き合わせて分析し、実際の合格・不合格のデータを蓄積することで、合格可能性を測ることのできる、自校独自の軸を持つことも重要です。

最近では、出願倍率などの情報をインターネットで早々に入手し、生徒が自己判断してしまう場合もあります。勇み足をさせないよう、日頃から生徒との信頼関係を築くことができます。大切だと感じています。

岡本先生プロフィール 教職歴37年。同校に赴任して2年目。広報部。英語科。「活躍できる場を与え、対話を通して導き、生徒一人ひとりに成長や自立を実感させたい。」

学校プロフィール 全日制/普通科/共学/1学年約400人/2019年度入試合格実績(現浪計)/国立公立大は、埼玉大、千葉大、東京工業大、横浜国立大、首都大学東京などに29人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大学、早稲田大などに延べ60人が合格。

改良したいのに、どうすべきか分からない……

指導ツールを募集しています!

「改良! 指導ツール ビフォーアフター」では、取材にご協力いただける先生及び取材を検討させていただく「指導ツール」を募集しています。「自校で長年使っているツールを見直したい」「ツールのより効果的な活用法を検討したい」といった、課題意識をお持ちの先生方のご応募をお待ちしております。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、必要事項①~④をご入力の上、指導ツールを添付して下記のe-mailアドレスにご送信ください。

※送信前に一度、生徒情報が削除されているかご確認ください

- ①学校名・お名前
- ②分掌・ご教職歴
- ③ツールの内容(目的・活用時期・活用方法)
- ④ツールに対する課題意識、改善要望

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「改良! 指導ツール ビフォーアフター」のツール募集でご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口(0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時~21時)にて承ります。(株)ベネッセコーポレーション CPO(個人情報保護最高責任者) 上記をご承諾くださる方はご送信ください。

思わず自分の考えを伝えたくなる 課題を通じて、考えて話す力を育む

小学校の外国語活動



好きな教科を伝え合う5年生の外国語活動。子どもたちは、勝部先生とALTとのやり取りや友だちが使った表現を参考にしながら、自分の考えを英語で表現しようとする姿が見られた。

この日は、相手を替えて計7回のペア活動が行われた。活動の合間に勝部先生が、「〇〇さんはこんな言い方をしていたよ」などと、全体に共有する時間を設けることで、子どもたちは次第に表現の幅を広げ、好きな教科やその教科が好きな理由を伝え合えるようになっていった。



私が訪問しました

愛知県・
私立名鉄学園とじく杜若高校

安藤亮輔

あんどう・りょうすけ



◎教職歴7年。同校に赴任して7年目。英語科主任。3年生担任。自分の考えを、論理的な構成の英文で表現できることを目指し、語彙力を増やすとともに、エッセーライティングを重視した授業を展開する。さらに、ペアトークやプレゼンテーションを通じてオーラルコミュニケーションも重視するなど、英語4技能をバランスよく高める指導を実践している。

愛知県・私立名鉄学園杜若高校

全日制／普通科／共学／1学年約290人／2019年度進路実績（現浪計）：国公立大は、東北大、愛知教育大、名古屋工業大などに29人が合格。私立大は、東京理科大、南山大、立命館大などに延べ272人が合格。短大、専門学校進学74人。就職73人。

私が案内しました

岐阜県・
瑞浪市立瑞浪みずなみ小学校

勝部佳純

かつべ・かすみ



◎教職歴20年。同校に赴任して2年目。外国語活動に力を入れ、前任校在籍時に2017年度文部科学大臣優秀教職員賞を受賞。文部科学省「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」執筆・編集協力。現任校に赴任後は、英語主任として近隣の小・中学校と協力し、来年度からの小学校英語の教科化に向けたカリキュラムを準備中。

岐阜県・瑞浪市立瑞浪小学校

教育目標に「じょうぶでよく働く子・仲よく助け合う子・進んでよく学ぶ子」を掲げる。2019年度の学校経営の重点項目として、確かな学力の定着と自己有用感の育成に取り組んでいる。児童数735人。

安藤 本校は希望進路の異なる3つのコースがあり、それぞれのコースで英語のコミュニケーション能力の育成を図っています。大学進学を目指すコースでは、発表や討論を通して英語運用能力や考える力が育まれています。意欲的に表現するという面には課題がありますが、希望進路が多様なコースでは、基本的な英語表現の定着を重視していますが、生徒の学習姿勢は受け身で、例文を読み合うだけの活動にとどまりがちです。今日の授業では、英語力に個人差はありましたが、どの子どもも楽しそうに英語を使う姿が印象的でした。相手の発言を理解し、受け入れようとする姿勢ができていますが、コミュニケーションの土台にあると感じました。

勝部 「英語の授業はコミュニケーションの授業です」と、子どもたちには繰り返し伝えていきます。相手を安心させたり認めたりする英語表現とともに、自分の考えを伝えたいという気持ちや相手との関係性を育むことを重視しています。

安藤 今日の授業は、好きな教科とその教科が好きな理由を質問し合い、クラスで2番目に人気のある教科を当てるというものでした。答えを当てたいとい

子どもたちや教師が英語でのコミュニケーションを楽しみ、自然と授業の目標に到達する流れが素晴らしいです。



子どもたちは、英語の自然なやり取りを見て、聞いて、使ってみることで、考えて話す力を身につけていきます。



う気持ちにさせることが、相手とコミュニケーションを取りたいくなる原動力の1つになっていると思います。本校では、課題設定は大学入試の過去問題を参照しつつ、生徒の英語力に合わせて決めることが多いです。そのため、受験を意識し過ぎて、生徒の興味を喚起する視点が弱いかもしれません。

勝部 子どもが心から興味を持ち、協働して問題解決に向かいたくなる課題を設定するようにしています。本時では、1番人気のある教科は予想しやすいた

め、あえて2番目としましたが、英語に自信のない子どもも、おのずと表現したくなる状況をつくるねらいもあります。

安藤 今日の授業では、「この表現を使って」といった指導がなかったのに、私が見る限り、全員が本時の目標とした表現を身につけていたのも驚きでした。

勝部 例文をなぞるのではなく、前後の文脈から表現の意味を推測させたり、子どもがその表現を使いたくなるような課題で興味を持たせたりすることで、本時の目標とした表現を自然に身につけさせるようにしています。また、主体的に英語表現を獲得させ、伝え合う楽しさを味わわせることで、コミュニケーション力を高めたいと考えています。

今日の学びを
自校の指導につなぐ

生徒が夢中で楽しむ
コミュニケーションの
場面を生み出していきたい



授業では、勝部先生自身が、子どもやALTとの会話を楽しむことを大切にしている。その姿を見た子どもたちが積極的にコミュニケーションを取り、自分の考えや思いを伝え合うことで、学級全体にその日の学びが浸透していく。



海に関する様々な領域の学びを通じて、 国際海事社会で貢献できる人材を育成

神戸大学 海事科学部

2年次から船舶実習がスタートし、 現場に必要な実践力を身につける

航海マネジメントコースの船舶実習では、学生が練習船を運航します。レーダーなどを用いなくても船の位置が分かるよう、海図にコンパスや定規で現在地を書き込むなど、実践的な学びを経験しました。(佐藤さん)



船での生活に必要なのは 協調性や協働性です

船舶実習では、狭い船内で共同生活をするので、通路を通る際は声をかけ合うなど、気遣いが不可欠です。大学の寮生活で協調性や協働性が育まれた経験が生きました。(佐藤さん)



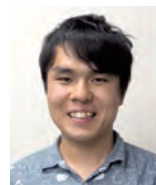
定点観測可能な海底探査機の 開発を目指しています

3年次の授業で流体力学に興味を持ち、海底探査機が流されずに定点観測できる方法を研究中です。探査機の材料を変更した場合に、どう動きが変化するかシミュレーションしています。(牛丸さん)

神戸大学海事科学部は、2003年に神戸大学と神戸商船大学が統合されて設置された学部だ(*1)。海事とは、海を舞台にした人間活動にかかわる事象で、その事象に関する様々な問題を科学的なアプローチで解決する学際的な学問が、海事科学である。同学部では、自然科学と社会科学を融合させた独自の教育体系を構築し、海事の舞台で国際的に活躍できる人材を育成している。

同学部の特徴の1つが、1年次は学科に分かれず海事科学を幅広く学び、2年次以降に学科・コースを選択することだ(*2)。マリンエン

1年次は幅広く学び、2年次以降に学科・コースを選択



海事科学部
マリンエンジニアリング学科
メカトロニクスコース4年
牛丸 脩平
うしまる・しゅうへい
熊本県立済々黶高校卒業。
海やロボットに興味があり、
同学部に入学。



海事科学部
グローバル輸送科学科
航海マネジメントコース4年
佐藤 杏華
さとう・きょうか
福岡県立城南高校卒業。
航海士を志し、同学部にAO
入試で入学。

*1 グローバル輸送科学科(航海マネジメントコース、ロジスティクスコース)、海洋安全システム科学科、マリンエンジニアリング学科(機関マネジメントコース、メカトロニクスコース)の3学科が設置されている。*2 コース配属は、グローバル輸送科学科は2年次前期、マリンエンジニアリング学科は3年次前期に行われる。なお、「志」特別入試、推薦入試及び外国人特別選抜により入学した者は、受験した学科(コース)に配属される。



複合的な視点で、地球規模の問題解決に貢献できる人材を育てる

上智大学 総合グローバル学部 総合グローバル学科

10人程度の少人数で、議論を深める手法について学びました

1年次の「グローバル・スタディーズ基礎演習」では、論文の書き方や議論の仕方などを学びます。議論する際は何に対して反論するのかを明らかにしてから、自分の主張を伝えるといった視点が身につきました。(佐藤さん)



ワシントンD.C.でのインターンシップを通じて、現地で活躍する先輩と交流

2年次の夏に、ワシントンD.C.のシンクタンクでインターンシップを経験。期間中、現地で活躍する先輩に会う機会があり、自分も英語力や専門性を磨き、世界を舞台に働きたいと思いました。(横井さん)

ラテンアメリカのフェミニズムについて研究中

ラテンアメリカにおいて、女性の政治参加は進んでいるものの、「女性であること」が原因の殺人が増えており、ゼミでは、その理由について研究中。専門科目でマジョリティーの立場を学び、研究を深めています。(横井さん)



グローバルとローカル、 双方から考える

上智大学総合グローバル学部総合グローバル学科は、「国際関係論」と「地域研究」、さらにそれら2つを融合させた「グローバル・スタディーズ」(*)を学び、グローバルとローカル、2つの視点を併せ持つことで、地球規模の問題解決に貢献できる人材の育成を目指している。

1年次は、「国際関係論入門」「地域研究入門」「グローバル・スタディーズ入門」を必修科目とし、3分野を横断的に学ぶ。総合グローバル学科4年生の佐藤誉翼さんは、分野横断で学んだ意義をこう話す。

「私は、幼少期、イスラエルに住



総合グローバル学部
総合グローバル学科4年

佐藤 誉翼

さとう・よはね
カナダのWinston Churchill High School卒業。中東研究に関心があり、入学。



総合グローバル学部
総合グローバル学科4年

横井 桃子

よこい・ももこ
愛知県・私立金城学院中学校・高校卒業。国際関係論に関心があり、入学。

* 1 グローバル化した世界の理解を目指す新領域の学問。グローバルな動きに目を向ける「国際関係論」とローカルな事象に焦点をあてる「地域研究」の両面から世界を捉える。

んでいました。自分の育った地域を抱えている国際問題に、次第に関心を持つようになりました。ただ、どの分野を学びたいのかまでは定まっておらず、1年次に政治、経済など、様々な分野を学ぶ中で、自分は思想や宗教から中東研究をしたいと、専攻を絞り込むことができました」

2年次からは、専門科目の履修を開始し、秋学期に「国際関係論」系の2領域（国際政治論、市民社会・国際協力論）と「地域研究」系の2領域（アジア研究、中東・アフリカ研究）から、自分がメインで研究したいメジャー領域とそれを補完するマイナー領域を選択する（*2）。

総合グローバル学科4年生の横井桃子さんは、メジャー領域では「国際政治論」を、マイナー領域では外国語学部で開講されている「ラテンアメリカ研究コース」を選択した。

「第2外国語でスペイン語を履修したことがきっかけで、ラテンアメリカに興味を持ちました。ラテンアメリカについて、メジャー領域では国際政治の面から、マイナー領域ではフェミニズムの問題の面から考えることができ、視野を広げながら学んでいます」（横井さん）

学生は、どこに力点を置くのかを考えながら学びを深め、自分の進路を定めていく。

低学年次から主体的な学びを進める「自主研究」

同学部には、2年次以降、自分の設定した課題について、担当教授の指導の下で研究を進める選択科目「自主研究」がある。意欲的な学生が多い同学部ならではの科目で、低学年次から主体的な学びができるように設置されている。佐藤さんも同科目を履修した1人。

「教授との対話を通じて、研究テーマがより明確になり、中東における宗教と経済の互恵関係を学ぶことにつながりました」

批判的・複合的な視点を持ち、卒業研究に取り組む

3年次からは、専門科目を履修しつつ、演習で各自の研究を深めていく。佐藤さんは、中東研究が専門の赤堀雅幸教授のゼミで学んでいる。

「ゼミで論文の深い読み方を学びました。赤堀教授の『この論文は評価されているが、欠けている視点が。それはどんな点か』といった

問いから、批判的視点を持つことの大切さに気がつきました」

横井さんは、国際政治のゼミに入り、ラテンアメリカのジェンダーに関して研究を進める一方、授業外でも学びを広げているという。

「性的同意の重要性を啓発する活動を行うサークルを立ち上げました。また、国際連合の女性機関でインターンシップもしています。それらの活動を通して、自分は女性のために働きたいという考えの下で就職活動を行い、働き方改善のためのソリューションなどを開発する外資系のIT企業から内定をいただきました。自分の進むべき指針となるパッションを大学時代に見つけられたことに感謝しています」（横井さん）

佐藤さんは、地域研究の視点を生かしたマーケティングを行いたいと考え、海外進出する日本企業を支援するIT企業に就職予定だ。

「日本企業の海外進出がうまくいかないのは、進出先についての地域理解が足りないからだと考えられます。市場調査では、データマーケティングが主流ですが、地域研究など、ミクロの視点も重視した分析をしていきたいです」（佐藤さん）

大学の思い

将来像や興味に応じて、自分なりに学びをデザイン



総合グローバル学部
総合グローバル学科
教授
丸井雅子
まるい・まさこ

本学部では、「国際関係論」「地域研究」の双方の視点から学び、自分の関心がある課題について、どのようなアプローチを組み合わせて研究することが最適なのかを考えられる環境を用意しています。

私の専門は東南アジア考古学と文化遺産研究のため、ゼミで文化遺産について研究したいという学生がいました。その学生は、メジャー領域は「アジア研究」、マイナー領域は「国際政治論」を選択し、文化遺産にかかわる国際法や国際関係論を学んでいます。そのように、1つのテーマを複合的な視点で学ぶことが可能です。

また、外国語学部の演習や、他学部の授業も履修可能で、一人ひとりの将来像や興味・関心に応じて、幅広く学びを進められます。

2020年度秋からは、英語による学位取得プログラムのコースを新設する予定です。同コースでは、学部内の専門分野と他学部の一部科目を英語で学ぶことが可能です。幅広く柔軟にかつグローバルに学びたい学生の入学を期待しています。

*2 マイナー領域は、メジャー領域として選択しなかった系から、1つの領域を選択する。「地域研究」系をマイナー領域にする場合、外国語学部で開講されている研究コースをマイナー領域として履修することも可能。

これからの会議・研修のあり方、作り方

今、学校現場では、次期学習指導要領等に向けて、教師同士の日常的な学び合いが求められている。職員会議や教員研修などで、教師集団が知見を結集し、学校をチーム化させる一助となるよう、今号も、対話の場づくりに取り組む実践者に話を聞いた。

「教師」という学校の宝から学ぶ、教師による教師のための研修

新潟県・私立北越高校

◎「報恩感謝 勤労奉仕」を建学の精神とし、知、徳、体の調和のとれた心身ともに健康で人間性豊かな有為な人材の育成を目指す。英語を中心に確かな学力を身につけ、国公立大学・難関大学合格を目指す「International 特進コース」、教科学習と部活動の両立を目指す「総合進学コース」を設置する。サッカー、野球、ソフトテニス、バドミントン、卓球、レスリング、ラグビーなど、部活動も盛ん。
◎設立 1936(昭和11)年 ◎形態 全日制/普通科/共学 ◎生徒数 1学年約440人
◎2019年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、北海道大、東北大、電気通信大、横浜国立大、新潟大などに44人が合格。私立大は、中央大、法政大、明治大、立教大、同志社大などに延べ365人が合格。 ◎URL <https://www.hokuetsu.ed.jp/>



副校長
青山一春 あおやま・かずはる
教職歴35年。同校に赴任して2年目。「教師として、誠実な灯台、誠実な羅針盤でありたい」



教務部部长
山崎高紀 やまさき・たかのり
教職歴16年。同校に赴任して16年目。理科。「生徒とともに成長し続ける教師であるために、常に前を向いて進む」



教務部研究推進係
佐藤健太 さとう・けんた
教職歴18年。同校に赴任して3年目。英語科。「授業と学校生活を通して、生徒の輝く『今』と『未来』をともに拓く」

自校の生徒、教師の実態に合った研修を教師自身でつくる

北越高校における教員研修は、2017年度まで管理職が企画していたが、18年度からは、教務部に研究推進係が設置され、教員研修の企画・運営は同係が担当することになった。教務部部長の山崎高紀先生は、自分が企画を立てる側となり、参加者の様子を一步引いて観察するようになったことで、同校が抱える教員研修における課題が見えてきたという。

「それまでの本校の研修の多くは、外部講師による講演を中心としたものでしたが、研修後、参加した先生方が、研修内容について職員室などで語り合うことはほとんどなく、研修がその場限りのもので終わっている印象は否めませんでした。研修のテーマは時宜にかなったものばかりでしたが、どこか『本校の生徒の実態とマッチしない』と、それぞれに違和感を持っているように思いました」(山崎先生)

教員研修の参加者が全教師の約半数にとどまっているのも、研修内容と自校の実態とのズレを教師が感じていたからではないか。従来の研修からの転換を図るため、山崎先生は、教務部研究推進係の佐藤健太先生と、18年度からの研修のあり方を話し合った。佐藤先生から教員研修の企画とし

て提案されたのが、東京都の私立かえつ有明中・高校の佐野和之先生（**本号 P.12 参照**）を講師に招き、参加者がこれまでの自身の授業を振り返りながら、参加者同士の対話を通して授業改善のヒントを考える研修だった。以前、かえつ有明中・高校を訪問した際、佐野先生から教師同士の対話型研修についての説明を受けていた佐藤先生は、ベテランと若手が、教科や分掌、コースの違いを超えて語り合うことで、これまでとは違った研修になると考えたのだ。山崎先生も賛同し、佐藤先生は早速、佐野先生に講師としての来校を依頼した。

「佐野先生は、『研修がその場限りのものにならないように、先生方と話し合って研修をつくるのであれば引き受けます』とおっしゃいました。講師としてお招きする佐野先生にすべてお任せしようと考えていましたから、自分たちも何か役割を担うのかと、一瞬ひるみました。研究推進係もできたばかりでしたし、佐野先生を招く研修の実現は、少なくとも18年度内は無理だろうと思いましたが」（佐藤先生）

山崎先生、佐藤先生は青山一春副校長に、佐野先生からの返事と自分たちの思いを説明した。話を聞いた青山副

校長は、「組織の体制が整っていないと言っけれど、今やらなければ、きつと1年後も変わっていないと思いませんよ」と言った。

「その時は、山崎先生、佐藤先生だけでなく、私も佐野先生から、教員研修を通して学校をよりよくしたいと本気で考えているのか、その『覚悟』を問われた気がしました。私自身、研修は誰かに任せるものだと思っていたことに気がつき、今ここで覚悟を決めなければ、来年度も自分たちは変わっていないと、自分自身に言い聞かせました」（青山副校長）

学校がよりよくなる機会として、ひ



写真1 佐野先生と、遠隔会議システムを使って教員研修の打ち合わせを重ねる研究推進系のメンバー。合計10時間の打ち合わせを通して、メンバー自身が「教師」「学校」のあり方について深く考えた。

るむことなく教員研修の改革に向き合おうと、山崎先生、佐藤先生の覚悟が決まった。

覚悟を持った 教師の言葉が 集団を1つにした

研究推進系のメンバーは、インターネット上の遠隔会議システムを活用して、18年8月の教員研修に向けた打ち合わせを、東京にいる佐野先生と重ねた（写真1）。そこでは、これまでの研修の問題点を整理したり、研修の企画アイデアを出し合ったりする以上に、「そもそも私たちは北越高校をどんな学校にしたいのか」といった、これからの学校や教師のあり方について語り合った。

「研修内容を検討しているうちに、いつしか、これまでの自分に向き合っていました。自分自身を素直に表現することが心地よく、研究推進系のメンバー間での相互理解も進む中で、研修に参加する先生方にも、教育と教師の本質を語り合っていたらいいと考



写真2 2018年8月に実施した教員研修の様子。参加者一人ひとりが、教師としてどのような存在でありたいのかを語り合ったことで、教師間に強い結びつきが生まれた。

えるようになりました」（山崎先生）

そして、18年8月、「教室という場をつくる上で、自分はどのような存在でありたいのか」を、参加者が考える研修が行われた（写真2）。まず、講師の佐野先生から、「教師は教室という場の一部であり、教師のあり方が生徒の学びに影響を与える」という、この日の研修の根本となる点を参加者に伝えてもらった上で、参加者同士で「聴く」練習を行った。それは、参加者が3人一組になって1人ずつ教師としての思いを開示し、それをほかの2人が傾聴するというものだ。参加者にとって、自分の考えや思いが受け入



写真3 18年8月の研修を経て、研究推進系のメンバーに有志が加わり、19年2月の研修の企画を話し合った。自由なひらめきを丁寧に言語化し、自校に合った研修を模索した。

れられる安心感の中で、自分の内面に、学びに向かおうとする力や挑戦しようとする力が湧き上がってくることを体感し、生徒とのよりよい向き合い方を考えるきっかけとなった。そして、研究推進系のメンバーが、今回の研修にかけの思いを「本気の言葉」で語り、教師としてのあり方を参加者全員で考えた後、参加者がグループになってこれまでの授業について語り合い、一人ひとりが授業改善への第一歩を考えた。

この日の研修の山場は、研究推進係が「本気の言葉」で自分の思いを語った時だったと、青山副校長は振り返る。「山崎先生たちが語る、育てたい生

徒像や目指す教師像を聞く中で、参加した先生方は、自分も自分の考えや思いを隠すことなく語ってよいのだと思っただけです。様々な個性を持った教師が、お互いの違いを知った上で、生徒のための集団になろうという雰囲気になりました」

山崎先生は、「勇気と覚悟をもって本音を話した」と振り返る。

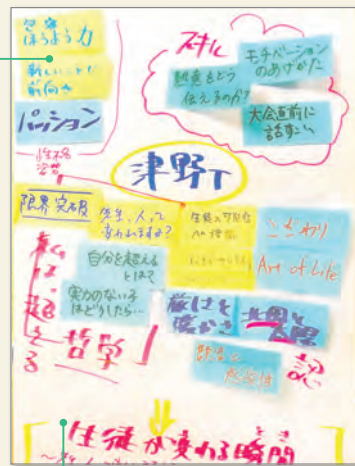
「参加した先生方から、『若い教師が何を偉そうに大きなことを言っているのだ』と、否定的に受け止められるのではないかと不安もありました。しかし、我々の言葉に先生方は真剣に耳を傾けてくださいましたし、涙ぐむ先生もいらっしゃいました。研修後の感想でも、『同僚の思いを聞いてよかった』『一緒に学校をよりよくしていきたいでしょう』といった声をたくさんいただきました」（山崎先生）

学校の宝として 同僚の言葉に耳を傾け、 お互いを高め合う

18年8月の教員研修の成功を受け

図1 「教師」という学校の宝を分析し、講演テーマを決める

◎聞いてみたいテーマをキーワードとして書き出す
「この先生にこの話を聞いてみたい」と思うキーワードを書き出し、カテゴリーに分類する。



◎キーワードを分析し、講演のテーマを決める
聞いてみたいことを分類し、最終的な講演テーマを決めて、講師役の教師に依頼。

19年2月の研修では、研修を企画するメンバーが、講師役候補の6人の教師にそれぞれ話してもらいたいテーマをあらかじめ決めた上で、各教師に講演を依頼した。講演の内容や参加者との意見交換の方法など、1セット40分間の研修をどのように組み立てていくのかについても、メンバーと講師が話し合いながら決めていった。

*学校資料をそのまま掲載。

て、研究推進係は19年2月の教員研修の企画を一緒に考える有志を募った。2、3人でも集まってくれば……という研究推進係の予想に反して、10人の教師が手を挙げてくれた。「8月の研修で教師としての思いを打ち明ける私たちを見て、今後の研修づくり協力しようと思ってくれたのだと思います」（佐藤先生）

が必要」「外部の実践例は、本校にはそのままあてはめにくい」など、いろいろな意見が出る中、「学校には高い専門性や個性を持っている先生がたくさんいるのに、そのリソースを生かし切れていない」「先生方の経験知を、学校の宝としてみんなで共有しよう」といった声が上がった（写真3）。

そして、2月の研修では、自校の教師が講師となって、授業や学級経営に関するノウハウや思いを参加者と共有するという方針が固まった。「どの先生に何を話してもらうの

図2 19年2月の教員研修の概要

- 日時** 2月21日(木) 14時00分～16時20分
- 内容** 発表20分 討議15分 質疑応答5分
※講師役の教師に内容を一任する場合もある
- ねらい** 優れた実践を共有し、授業改善を活性化する
- テーマ(講演タイトル)**
- 授業について
 - A先生「教員は『教え、支援し、案内する』=三位一体の演技者」
 - B先生「授業に楽しいスパイスを!～甘いだけでは人は動かし～」
 - C先生「パフォーマンステストとその評価～英語総合αの取り組み～」
 - 部活動について
 - D先生「生徒が変わる瞬間(とき)～先生、人って変われますか?～」
 - E先生「部活動で育てる生徒の主体性」
 - 学級経営について
 - F先生「結果にコミット!～おでんに見るクラス経営～」

タイムテーブル

	会場1	会場2	会場3
14時00分～14時40分	A先生	D先生	F先生
14時50分～15時30分	F先生	D先生	C先生
15時40分～16時20分	A先生	E先生	B先生

*学校資料を基に編集部で作成。

か、メンバーで話し合った記録(図1)を持って、『このテーマで先生のお話が聞きたいです!』と依頼に行きました。その場で私たちにミニ講義を始めてくださいるベテランの先生もいらっしやって、企画段階からとても楽しい時間を過ごしました(佐藤先生)

実際の研修は、講師の発表、参加者同士による語り合い、講師と参加者との質疑応答を1セットにして、3会場で実施された。テーマは授業、部活動、学級経営と多彩で、参加者は自分が聞きたい講演を選び、参加した(図2)。

「2月の研修は、それまでの研修に比べて参加者が大きく増えました。そ

れは、多くの先生方が、同じ学校の仲間との対話を求めていたからでしょう。研修の内容を要約したリポートを作成しましたが、研修に参加できなかった先生方も興味を持って見てくださっていました(図3)。研究推進係だけでなく、有志の先生と一緒に考えたからこそ、本校の先生方にとってしつくりくる研修が実現できたのだと思います(佐藤先生)

キャリアや教科を超えて教師が語り合い、それぞれのよさを知ることが、教師としての成長において相乗効果を生み出すと確信した研究推進係は現在、校内の教師同士の自由な対話を

図3 2月の研修の報告書



研修では、6人の教師が講師を務めた。研修後、すべての講師の研修内容を要約したリポートを作成し、校内に配布したことで、参加できなかった研修についても概要がつかめた。教師という学校の宝の存在に気づいてほしいという願いも込められたリポートとなった。

*学校資料をそのまま掲載。

促進する場として、「けんすい(研究推進係の略)カフェ」を月1回開催している。研修以外にも、定期的に教師が語り合える場を設けることで、同校の教育を教師全員で磨き上げる風土を醸成するためだ。

「今回の取り組みは、山崎先生、佐藤先生が、それぞれ抱いていた問題意識を率直に周囲の先生方に伝えたこ

とがきっかけで、仲間が増え、学校全体を巻き込んでいったことに価値があると思います。様々な個性を持った教師をつなげることができる若手の存在は、紛れもなく本校の宝です。人を育てるのは人だからこそ、教師がお互いを認め、成長し合う風土を、校内に育んでいきたいと思っています(青山副校長)

2019年8月号へのご意見

20年後、30年後の社会を見据えた教育を

我々教師は、目の前の生徒だけを見て教育活動を考えがちだが、8月号の特集を読み、生徒たちは社会の未来を担う「未来からの留学生」であることを改めて認識した。彼ら、彼女たちが活躍する20年後、30年後の社会を見据えて、今、教師として何をすべきなのか、Society 5.0にかかわる知見を参考に、「木を見て、森も見る」教師になりたいと思った。

北海道 市立札幌開成中等教育学校 松澤 剛

高大接続改革の背景理解を深めたい

「大学入学共通テスト」に向けて、校内で各教科・科目担当に、試行調査の問題分析と、問題作成方針を踏まえた本校の指導方針をまとめてもらった。ただ、高大接続改革の背景を十分理解する機会を設けていなかったため、その内容が薄かった。8月号の特集の記事を資料として、今後議論を進めていきたい。

静岡県 匿名希望

時代と世界とシームレスな学校へ

社会が10年単位で変化していく中、学校はいまだにSociety 3.0の工業社会だと感じた。8月号の特集を読み、社会はさらに次に進もうとしているのに、学校ではそうした議論も交わされていないことに、非常に危機感を覚えた。もっと自由で、イノベーティブで、時代と世界とシームレスな学校としていかなければ、さらなる成

長は望めないと実感させられた。

山口県・私立高水高校付属中学校 佐伯大介

育成を目指す資質・能力の共有化の重要性を実感

8月号の『学校教育デザイン』を描く道標しるべ」を読み、岡山県立瀬戸高校のように、生徒への育成を目指す資質・能力を示すことで、生徒を始め、教師や地域も、各教育活動がどの資質・能力を育む活動であるのかをきちんと認識できるのだと感じた。また、指導改善を検討する際にも、その資質・能力を念頭に置きながら、再構築することが大切だと思った。

東京都・私立東京農業大学第一高校 小堀健一

行政と学校が連携する手法を学んだ

少子高齢化・人口減少は、全国で大きな課題となっている。8月号の「指導変革の軌跡」で取り上げられた沖縄県立久米島高校の記事で、地域の子どもたちを育てることと併せて、行政と学校が連携し、よりよい方策を目指して取り組む姿勢が大変参考になった。

富山県 匿名希望

会議にアイスブレイクを取り入れる手法が参考に

8月号の「これからの会議・研修のあり方、つくり方」で紹介された、会議にアイスブレイクを取り入れるという発想が新鮮だった。会議における準備の重要性も理解できた。

栃木県立佐野東高校 寺崎義人

OFF SHOT



今号の「指導変革の軌跡」の取材で訪れた静岡県立焼津中央高校。玄関で私たちを迎えてくれたのは、学校PRのポスターでした。精悍な顔つきが学生服に映えます。キャッチコピーは校内で考案、モデルはレスリング部とバスケットボール部の生徒。「ユニホーム姿で撮影しようとしたら、生徒が恥ずかしがって」とのことです。でも、高校生活を通じて鍛えられた体を披露するのは、学校PRという趣旨に反さないはずだと、私は思うのです。そんなポスター談義から取材は始まりました。そして、取材を終えた今も、先生方が練り込まれた言葉と生徒の真っ直ぐな眼差しが頭から離れません。言葉を磨けているか、彼らの目に映ることになっても恥じることはないかと、背筋を伸ばして筆を執っています。今年度からVIEW21編集部配属となりました河野仙一、初めての編集後記でした。(河野)

『VIEW21』高校版 公式アカウント

LINE@

友だち募集中!

『VIEW21』高校版や教育に関する最新情報をタイムリーにお届けします。*お友だちの登録方法は、右の2次元バーコードを読み取っていただくか、LINEアプリの「友だち追加」>「ID検索」で「@view21」とご入力いただき、追加をお願いいたします。



VIEW21 高校版 2019 12 月号

次号は 12月16日発行 (予定)

『VIEW21』高校版は年6回の発行です

教師を育てた 言葉たち

No. 016

長崎県立対馬高校 田川耕太郎先生 たがわ・こうたろう

◎教職歴27年。同校に赴任して1年目。諫早高校、長崎県教育委員会、長崎東高校教頭などを経て、初任校である対馬高校の校長を務める。令和元年度から国際文化交流科が設立され、普通科、商業科の3学科体制となり、さらなる進化と魅力化を図る。



教 師になって13年目、長崎県立諫早高校に赴任して8年目に、私は3学年主任を務めることになりました。当時の諫早高校は、尾崎健次先生、原田尚之先生、そして石山雅晴先生が進路指導主事としてバトンをつなぎ、生徒が自分のあり方・生き方を考える進路指導、諫早高校で受け継がれていく「志の教育」を完成させつつありました。

4月のある休日、自学自習のために登校する3年生を出迎えるように、「雲上蒼天」と書かれたホワイトボードが廊下にあるのを見つけました。雲とカモメの絵、そして「雲を抜けると青空が広がっている」と、受験生となった3年生に向けて、受験勉強という困難の先の喜びを示唆するひと言が書き添えられたその言葉は、石山先生の座右の銘であり、生徒も私もそれまでに何度か耳にしたことがありました。しかし、12年前のある朝、たった一度だけ目にしたホワイトボードに書かれたその言葉は、映像として、そして、せっせとホワイトボードを準備する石山先生の想像上の姿とともに、私の脳裏に深く刻み込まれました。自分の気持ちをそのまま丸ごと生徒にぶつけることも少なくなかった私にとっては、さりげなく、しかし確実に生徒の心に思いを染み込ませるような石山先生の伝え方に、生徒への向き合い方を学んだ気がしました。

思 えば、石山先生は常に真剣に、しかし遊び心を持って生徒と向き合っていました。7月の学年集会では、3年生に「受験の天王山をみんなで乗り越えよう」と、受験生としての夏の過ごし方を

説き、激励すると、その翌日、石山先生は小さく「天王山」と書かれた真っ白な模造紙を、3年生の廊下に張り出しました。そして、何日か経つごとに「天王山」の文字は少しずつ大きくなっていきました。「また字が大きくなった!」と笑う生徒たちは、石山先生とともに険しい山道を楽しみながら登っているように私には見えました。夏季休業中、1週間にわたって行われた学習合宿の最終日には、突如生徒たちが「先生方へのお礼としてみんなで歌います」と、ゆずの「栄光の架橋」を歌ってくれました。合宿をよいものにしてという石山先生を始めとする教師の配慮が生徒に伝わったからでしょうし、それを受け取る感性を持ち、感謝の気持ちを素直に表現できる生徒に育ってくれたことは、学年主任として大きな喜びでした。

翌 年度、石山先生から進路指導主事のバトンを手渡された際、私は、あの日の「雲上蒼天」の言葉のように、生徒をそっと支える存在になろうと思いました。3年生の進路通信に、部活動や学校行事で輝く生徒の写真を積極的に載せるようにしたのも、「君たちの高校生としての頑張りを、先生たちは見守っているよ」と伝えたかったからです。

あの日の朝のホワイトボードについて、卒業生と思い出話をすることがよくあります。たった1日の出来事が、多くの生徒の心に焼きついているのです。教師の言葉が、雲の中にいても明日の蒼天を信じる力、晴れた空を見上げながら「もっと美しい世界があるはず」と、より高い目標を掲げる力を育む……あの日、私は、言葉が志を育む瞬間を目にしたのです。

長崎県立対馬高校 全日制／普通科・商業科・国際文化交流科／共学／1学年約150人／2019年度入試合格実績（現浪計）国公立大は、長崎大、熊本大、鹿児島大などに25人が合格。私立大は、早稲田大、立命館大、西南学院大などに延べ92人が合格。

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume4 2019年10月号
2019年10月15日発行／通巻第378号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
VIEW21編集部 〒163-0415 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング
©Benesse Corporation 2019

お客様
サービスセンター

[フリーダイヤル] 0120-350455

受付時間 月～金 8:00～19:00 / 土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17